
無双オラッチ(三國無双の短編小説集)※OROCHI有 ※少しエロパロ

松山義人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無双オラッチ（三國無双の短編小説集）※OROCHI有 ※少しエロパロ

【Nコード】

N1313J

【作者名】

松山義人

【あらすじ】

三國無双中心のmix（源平、西遊記、戦国無双）の二次短編小説集。ギャグもシリアスも有。1話毎に独立した構成。魏、呉、蜀、西普のオールキャラ。※※※新シリーズ「小咄」が始まりました。※※※HPも宜しく..http://id46.fmp.jp/337/MusouPneuma/

オロチ軍から脱走を仕掛けた呂布と貂蟬の二人は共に、刺客を差し向けられている。

刺客達の執拗な攻撃から当て所なく逃れる日々。

鶯の啼る獣道や荒野の岩塊の間を、早足で通り過ぎた。生生たる銘木は伐採を避けながら繁茂する。

今日は大和の地へ辿り着いた。

「貂蟬。此処まで来たら安全であろう」

「アンタ。日本の社寺は豪華で壮麗なのです。是非とも見物しましょう」

「貂蟬。俺は常に坊主が屯する忌むべき寺院など御免仕りたいのだ……」

「そう？」

オロチ軍の手下の生活は更に御免である。

新天地を見出した後には貂蟬と一緒に安居を構えるべきかと考える。

オロチ軍と連衡する連合軍の魏国は捜査本部を設置した。

各地の関所では逃亡者の呂布に対して指名手配が行われた。

各地の集会所で瓦版や高札の配布が行われたので安易な油断は禁物である。

” 颯「ヒュウーッ」 ”

灰色の山鳥が順風の間を大空高く飛び交う。

枝葉が陽光を遮蔽する林床の草藪の狭間に複数の人影が映じる。

「呵呵、呵呵」

老爺と相伴する白妙色の羽衣を着る少女との連れ合いが此方側へ段々と近寄って来る。

老爺は陳珪、少女は三蔵法師。

三蔵法師は微笑みながら小さな身体の跳舞をはじめる。

「呵呵、呵呵」

風貌は端麗であるが嬌声を発するの様子なので恐らく” 知恵遅れ ”である。

下顎から涎を流しながら己の様子を窺い見る三蔵法師に対して真横から老爺が窘める。

（或いは此の不思議な二人組はオロチ軍か？）

（若しくは連合軍が差し向けた刺客ではあるまいか？）

長らく逃亡生活を続けていた呂布は悉く疑心暗鬼の状態である。

（グウ）下腹の音が鳴る。

「呵呵、呵呵、呵呵呵呵」

三蔵法師が衣裳の中から麻衣の巾著を取出す。

片手の腹の上に巾著の干し飯をのせながら呂布に対して差し出す。

（へえー、頭はイカれていても心は優しいのか）

「どうもどうも、頂きます」

呂布と貂蟬は陳謝をした。

「呂布殿。我們もオロチ軍の圧政から逃れて此のような僻村で、静居を致しております。宜しければ我等の屋敷へ案内を致しましょう」

陳珪は呂布に対して宿泊を請じた。

しばらく野宿暮らしが続いていたが、ようやく屋根の下で休息する事ができる。

呂布は陳珪に対して信頼の感情を抱きはじめた。

” 颺「ザァーッ」 ”

” 戛「ガァーッ」 ”

足音に仰天した山鳩や鶯が高翔をしながら彼方の天空へ跳び去って行く。

随所の環濠集落の風倒が眼下に見渡せる。

碧色の竹林の中を抜けると陳珪の屋敷に至る。

土間の奥に轆轤^{ろくろ}。

屋外には陶器を焼く炭窯が置かれる。

囲炉裏を囲みながら和やかに談笑をはじめ。

陳珪は粥飯と黄酒をすすめる。

「この臭いは？」

呂布が指先で鼻孔をつまむ。

炉端の真横に寝ころがる三蔵法師の衣裳の腰部から異臭が漂う。

陳珪が平手打ちを加えながら叱責する。

貂蟬は布巾で始末をする。

「呂布殿。三蔵法師は私の養女なのですが此の様な調子で全く忝^{かたじけ}のうございます」

「良いつて事です。陳珪殿。なれっこですので」

「まあ、呂布殿は親切な事を云ってくださいますな……」

「ゞくう」

炉辺に構える呂布の図体に対して体軀を寄せながら腰部を擦^{さす}る。
全く無邪気で天使の如き笑顔を浮かべている。

叱り付けた陳珪は中座をした後で厠屋^{かわや}へ向かった。

「ぐくう〜」

「俺様は孫悟空殿ではござらぬよ」

三蔵法師の嬌態を成すが儘ままにしながら黄酒を仰ぐ。
啞然とした貂蟬は状況を見ぬふりをする。

（其れ程までに孫悟空殿の事が好きなのだろうが全く気の毒な事であるが如何する事もできん）

（陳珪殿もかのような娘子が居るのでは全く気の毒な事である）

自分の娘の呂玲綺の知能も疑わしいと思う時が有る。

行き掛かり上、陳珪の屋敷で起居を共にする事に決めた。

薬草畑や山林の荒仕事の加勢をした。

長閑のどかで幸福な日々を過ごした。

（ああ何と有難い事か。これが平安というものか）

（俺は今まで間違った生き方を選んでいたのだ）

陳珪の好意に対して呂布は感謝の念で一杯である。

己が如き”ならず者”に対して都雅な性分である陳珪が受け入れると計る事は考え違いなのである。

一時だけでも夢を見たいものだと思ふは考へる。
己の愛する貂蟬の爲である。

”カンッカンッ”

碧色の空に東から温かい風が吹く。

河川は雨期に入ると氾濫する場合がある。

森林の伐採は禁じられているが陳珪は特別に許可を受けている。

方天画戟を把持する呂布は陳珪より依頼を受けた樵仕事の最中である。

（呀、呀、呀）

山麓の彼方から嬌声が聴こえる。

「おや？何かありましたな」

「ウヒョー、いい躰してんのお、姉ちゃん」

「呀、呀、呀」

——門前町の界隈の”ならず者”である李確りかくと仲間の郭多かくしは散歩中の三蔵法師を襲撃した。

嬌声をあげる三蔵法師。

「ウヒョーッ、ええじゃんか、姉ちゃん」

キャンキャン
「呀、呀」

「嬉しそうだな、姉ちゃん、コレか？ウヒョーッ」

キャンキャン
「呀、呀」

李確^{りかく}と郭多^{かくし}は二人がかりで抵抗する三蔵法師の羽衣を脱がし始める。

「ウヒョーッ、アゝゝイヤーッホー」

羽交い絞めを受けながら露にされた乳房を振りみだす三蔵法師は、嬌声をあげながら悩ましい腰をふる。

「ウヒョーッ、もう濡れてやがる」

キャンキャン
「呀、呀」

「ウヒョーッ、ウヒョーッ、じゅるる」

キャンキャン
「呀、呀、悟空」

「何が悟空だ。姉ちゃんはオレたちのような野暮な男が似合うぜ。ウヒョーッウヒョーッ、——————おお?????」

”日崩「シューッ」”と飛来する方天画戟は”嘩「グシャッ」”と

李確の脳天を穿つ——粉微塵に打碎れる。
胴体から勢いよく血烟が奔出する——崩れ堕ちる。

屍塊から血塗れの方天画戟を抜き取る。

「うわあ、呂布だ。助けてくれエーッ」

郭多も同様の最期を遂げた。

谷川に洗濯物を放つといった儘で馳せ参じた貂蟬は負傷した三蔵法師を介抱する。

「大丈夫？」

「汪、汪」

「きやんとしか云えぬとは」

”轟”
”轟隆轟隆”

陰風が流れる——雷霆が煌々と鳴動する。

「呂布、観念なされい」

突如、目前へ推参するはオロチ軍の軍師の姐己と幹部の孫悟空である。

「姐己、孫悟空——我々をオロチへ連れ戻さんとしてのお出ましましたな？」

「違うんだよ、呂布。アンタがオロチ軍の総本山である本郷城を脱走した際に董卓様を処断したでしょ？だからアンタは死罪って決まったの。連合軍もアンタを指名手配してるしさ」

——オロチ軍の大幹部である董卓は遠呂智から格別の待遇を受けていた。

多額の金塊を受領した董卓は豪華な生活を送っていた。

「そうだったな。姐己」

呂布は方天画戟を緊握、上段に掲げる——”日崩「シューッ」日崩「シューッ」”と大振りをしながら威嚇を始める。

「アンタさー、もうおしまいじゃないの？見苦しいったら」

「先ずは、姐己。貴様から片付けますぞ」

”日崩「シューッ」”と方天画戟を中段より姐己の体軀へ振下す——金箍棒で”戛「ガンッ」”と抑止——弾き戻される。

「貴様ッ」

「呂布。紛云とした事情あって邪魔して申し訳ない。全くあれは貴様と同類では？」

「何だと」

「ククク」

孫悟空は金箍棒を頭上に高く掲^かげる――”日崩「シュン」”と振
回す。

「汪^{キャン}、汪^{キャン}、悟空、好きよ、好きよ、愛してる」

肌けた格好の三蔵法師が目前へ出現。

孫悟空の体軀はは三蔵法師から体を擦り寄せられる。

”パシッ”と顔面を打つ。

間隙に孫悟空は背後を見せる――”日崩「シューッ」”と方天画
戟が打迫る――閃避した孫悟空、分銅鎖を振回す――”颯「シ
ューッ」”と呂布の体軀へ打放つ――分銅鎖は呂布の図体へ絡み
付く。

姐己も同時に分銅鎖を打放つ。

二手より放たれた分銅鎖は絡みつきながら呂布の図体を”呀「ギシ
ギシ」”と軋ませる。

「ぐ。ゲホッゲホッ」

「降服せよ!!」

絞殺する為に堅握する分銅鎖へ孫悟空は力を籠める。

「うう」

呂布、図体をねじりながら分銅鎖を引く。

”ズルズルズルズル”

「わあ」

”ドシン”

孫悟空と姐己の二人は転倒。

”奔「パン」奔「パン」奔「パン」奔「パン」”

仕掛けられた煙玉と爆竹が炸裂。

「何だ??」

周辺に煙塵が濛々と立ち込める。四方の視界が遮られる。

煙玉は呂布がオロチ軍へ出仕していた頃の支給品であった。

煙塵が拡散した後、呂布は逃亡していた。

狼狽していた様子で取り残された三蔵法師は、大和国の筒井城まで連行された。

大和国筒井城は城郭の内側に市場と侍屋敷が立ち並ぶ。

北は平城京、南は藤原京へ辿り着く中ツ道（橘街道）が貫通する。

風水と版築技術を駆使した筒井城はオロチ軍へ組した松永久秀から奪い取られていた。

唐代の玄奘三蔵の弟子が起こした法相宗の興福寺一乗院の衆徒、筒井順慶は城を奪取する為に獅子奮迅して松永久秀と戦う日々。

（※筒井順慶の説明は当ページの「後書き」で書いてます）

天陽が暮れた後で夜刻が訪れる。

筒井城では三蔵法師が地下牢で軟禁を受けた。

夕餉を済ませた孫悟空と姐己の二人は城内の会所に構える松永久秀へ復命した。

結託して將軍暗殺を共謀した三好三人衆は反乱を起こした。三好長慶の跡継ぎである義継はを誘拐された。

三好三人衆の郎党たちは松永久々秀に対する滅誅を成す為に大和の地を目指して各地から進軍している。

「姐己殿、いつもおれの用事に付合せて彼方あちこち引っ張りまわしてしまつて申し訳ありません。三蔵法師は処刑しましょう。松永様がお待ちかねですから」

「……だめよ、悟空。人質に使うから生かしといてあげて」

——冥闇とした地下牢の中では蜜蝋が燈された。
板畳の上に身を横たえる三蔵法師は悄然としている。

昼間、李確^{りかく}から暴行を受けたので出血している。

「晚上好。三蔵さん。落ち着いた？食事持ってきたよ」

沐浴上りの妲己の痣痕が残る胸の谷間は雫滴を垂れる。

空腹だったので妲己の手料理を喰らう三蔵法師の首元に銀色の十字架が煌く。

「三蔵さん、女禍の安否は如何？悟空ったら心配性でさ」

三蔵法師と同様に女禍もキリシタンである。

イエズス会の宣教師に多くの友人を持つ女禍は、孫悟空から度々呼び出されて説得を受け、棄教を強要されていた。

近場で眺める妲己の美貌に三蔵法師は彷彿として溜息をつく。

「妲己さん、女禍と太公望は周の派閥、妲己と孫悟空は殷の派閥でしょ？」

「どうかなあ。興福寺の筒井クンも南朝に寄るか北朝に寄るかは派閥が曖昧のようねえ」

——殷代末期の紂王の妃であった妲己は妖狐の伝説を持つ。

料理に精通する孫悟空にも殷の宰相、伊尹の如きとの巷間の評判があった。

三蔵法師、「姐己さん、派閥といえば呂布さんだって太公望さんの派閥になるのかしら？同じ呂氏だから」

姐己、「あはん、太公望の奴、迷惑してんじゃないの？」

——周代の呂尚（太公望）が建国した斉国は春秋時代に陳国の末裔である田氏（陳氏）より篡奪を受けた。一時は秦国に比肩する程、繁栄したが、燕の楽毅の侵攻が原因で国力が衰退した。

（※夏侯尚の子、夏侯玄は著作で楽毅を賞賛した）

三蔵法師、「姐己さんは以前、呂布さんと付き合ってたんでしょ？」

姐己、「呂布のイケナイ理由は卑弥呼のような立派な女性に手を出すからよ」

オロチ軍の重鎮として暗躍していた頃の呂布は卑弥呼に対して姉のような思慕を寄せていた。

——姐己は地下牢の三蔵法師との会話が済んだので中座した。寝所に戻ると仲間の孫悟空が待機していた。

「悟空、待たせてごめんね」

その後は雑談を続けた。

話題は世俗的な内容に移った。

「こら、悟空、三蔵さんを何でシカトしたの？」

「何とでも云ったらどうです？」

「機嫌が悪いのね。昼間、アタシが呂布と目を合わせたからその理由で悟空は妬いていたの？」

「ばかを云うな。妲己殿……」

呂布と妲己が過去に懇ろの間柄であったと訊いたので、孫悟空は常に危機感を持っていた。

筒井城の書架に残された難解な書物を、妲己は内容を諳んじる事ができる。

機械的な書物の価値観に拠って事物を思索する妲己は、呂布の如き悪党にも気脈を通じ合わせる。

悲恋を乗り越えた孫悟空は、高嶺の花である妲己を手中に収めていた。

「呂布はオロチ軍に居た頃、色々おべっかを弄して卑弥呼殿を誑かさんとしておった。呂布も夢を見ておるな」

「ねえ、悟空、筒井ってユダヤかな」

「我々はムスリムの側ですからね」

オロチ軍であっても、イエズス会が人頭税を誠意を込めて支払うの

であれば休戦して同盟する場合もあった。

——魚油が燃える置行灯は寝所の明り障子に映る陰影を揺らした。

「^{アアン}吁吁、悟空。這要、這要」

「姐己、松永殿はオロチ軍に対して裏切るのではなからうか」

「うん、松永ちゃんね、どうなんだろう？でも」

「でも？」

「筒井クンは呂布と結託して筒井城を奪取する気よ。相手が呂布だなんて怖いかな」

「……ご心配には及びません。姐己殿。万一、死ぬ場合でも我々は一緒です」

——幽冥とした薄闇、滑沢で白妙な地肌や丹田を赤茶色の両眼で見据える。

水銀病を煩う姐己の容態について針を打つ孫悟空は治療法を知り尽す。
肌膚の色付きで一瞬に推察できる。

姐己の淫靡な桃肌の全体は突如——銀白色に変わる。

（パーン）

(パン)

閃光が夜天を映じている。

「悟空、今の光は？」

「狼煙花火か？」

「先程の女の子かわいそう。悟空、相手してやれば？」

「無い夢を彼女に与えて如何しますね？」

「……^{アア}吁吁、悟空。下に居る人に聞こえちゃうたら」

愛撫の嬌声と寢所の軋む音を立てる床板の真下は——三蔵法師が居る地下牢である。

曙の刻に至るまで続いた。

陳珪は狼煙をあげて援軍を召致した。

昏々（こんこん）と眠り、夢を見た者も、眠れぬ者も、星雲に煌く閃光を見たであろう。

胡蝶の夢——僧侶の夢想は正夢であるらしく夢想は即ち無双である。

しかしながら、如何なる高僧^{バラモン}の夢想であつても今の乱世の時代では——虚ろで儚^{はかな}き事は恰^{あたか}も凡夫の如し。

筒井城の戦い（1566）後編へ続く
※後書きがあります

****筒井氏について****

玄奘三蔵の弟子が起こした法相宗の高僧として奈良時代に渡来した行基は、各地で福利厚生施設とインフラを整えた。法相宗を奉じて栄華を極めた興福寺は、平安時代に勃興した真言宗と道鏡が原因して衰退した。

木曾義仲は天台宗門派の他に興福寺に対して加勢を行った。

足利幕府の初期の大和国では、興福寺の一乗院と大乘院との間で抗争が起きた。

（※古代の蘇我氏と物部氏との間の抗争の舞台は興福寺同士の御家騒動に移行したのだが、筒井氏は物部氏の末裔である）

興福寺の一乗院（筒井氏）の側を支持した独裁者の足利義教（※元天台宗座主）は管領家の畠山氏を筆頭に各地の騒乱に介入して派兵を行い、応仁の乱の勃発を招いた。北朝方の一乗院側は畠山政長の側を支持した。

六角氏を攻撃した畠山氏に対して、細川政元は反旗を翻す。

一乗院は大内氏と結託して南朝側へ鞍替えをした。

細川氏が滅亡した後、筒井順慶の時代に下ると政長の子孫である畠山尾州家が存続した。

鉄砲部隊について

平安末期の保元の乱に関わる鳥羽天皇は覚鑠という悪僧を重用したが、覚鑠は真言密教であり、高野山による厳しい内部批判を受けた。覚鑠が創始した新義派真言宗は戦国時代に於いては紀伊国の根来衆が鉄砲部隊として雑賀衆と共に活躍中。

（※司馬遼太郎さんが何か言ってますよ）

——漆喰の壮麗な筒井城の城郭を旭陽が燦々（さんさん）と返照した。

城内に搬入される輜重車の護送の任を受けた松永久通は、総大将の筒井順慶の迎撃を受けたので、退却を余儀なくされた。

外郭の手前で”蕭蕭”^{ヒヒーン}と嘶く^{いみな}赤兎馬に騎乗する呂布が見参する。

矢倉に両脚で起立する孫悟空は下瞰^{かかん}に構える呂布に対して、罵詈雑言を矢継ぎ早に浴びせかかる。

「そろそろ観念なされると如何です？」

「孫大聖よ。何故に三蔵法師を無碍にしなさる？」

「何とでも仰ると良い」

天空が白銀色に変じた際^{さい}に水堀に跳ね橋^はが渡される。

筒井城の虎口の中からオロチ軍の軍師の妲己と金箍棒を把持する孫悟空が出現する。

妲己の両腕の中に抱えられる三蔵法師は城郭の下に構える呂布の目前まで”ドサリ”と身体を放り捨てられる。

「貴方も三蔵法師を成敗したらどーお？卑弥呼が喜ぶよ」

（三蔵法師を成敗すると卑弥呼殿は呂布を愛してくれるのではない

か？)

拳を握り締めた呂布は唇を噛みしめる。

天空の陰雲から糠雨^{ぬかあめ}が”ポトリポトリ”と滴り落ちる。

「姐己。俺は真っ当な人間になるのだ。俺は陳珪殿に対して借りがあるのだ」

「それは如何ですか？」

嗤笑をする孫悟空、”日崩「シュン」”と振回す金箍棒を下段から”颯「シューッ」”と斜めに振上げる————”戛「ガシッ」”と抑止する方天画戟で前方へ押し戻す————”嘩「グシャッ」”と碎ける孫悟空の体躯は血飛沫を散じる。

陳珪、”お見事です”

呂布、”まだ終わっていません”

僅かな隙間が裂けた暗雲から”颯「シュウーッ」”と滑空する銀色の祥雲に跨^{またが}る孫悟空が壮健な体躯の姿形のままで亦^{また}、出現する。

陳珪、”おや？”

祥雲から跳び降りた孫悟空の体躯を狙い定める。
方天画戟を中段から”日崩「シューッ」”と斜めに振下す————
孫悟空は上方へ”颯「シューッ」”と跳び退く。

安定を外す————大地へ傾倒————”日崩「シューッ」”と方天画

戟がと目前に打迫る。

”「口四」嘘呵吸「口喜」吹呼”

孫悟空の分身と分身が続々と集結しはじめる。

「何だ？」

大地に仰臥する格好の孫悟空は”颯「ヒュウツ」”と片脚を打廻す——足払いを受けた呂布は体勢を持ち崩す——蟻の如きに群がる妖術士たちは大柄な体躯を氷の塊で覆いはじめる。

”「口四」嘘呵吸「口喜」吹呼”

（パチパチ）

（パチパチ）

四方の茂林の中から轟轟と出火しはじめた。

ドカーン
”轟”

雷光が鳴動する。

烈風が”嘯「ビュウ」”と舞い上がる。

小型の火炎放射機を片手に馳せ参じた筒井順慶——

「呂布殿は御無事か？しかし大雨と氷であるのに焰が消えぬと申します事は」

順慶より救出を受けた呂布、

「はー、氷の次に焰とは」

焰術を使用する日の朝餉で孫悟空は米飯にアルミニウム粉末をフリカケにして喰らっている。

故に焰は消えずに燃え続けていた。

姐己、「ヤッホー。ジュンちゃんはお元気かな？」

若い筒井順慶の姿を注視した孫悟空、

「ははん、纏めて皆殺しにしますぞ」

”^{パンツ}奔”

火花の炸裂音と銃声が鳴動。

散じた硝煙の臭気が芬芳と周辺に揺蕩^{たゆた}う。

「呻^{うづ}」

孫悟空の身体を庇い、盾になった姐己の体軀を火縄銃の鉛玉が穿^{うが}っていた。

蒼白を呈した孫悟空へ向けて矍鑠^{かくしゃく}たる老人、後漢太尉陳球の甥、元徐州太守である陳珪は火縄銃を構^{また}えて亦しても発砲する。

”奔「パンツ」”

長子の陳登が鉛玉を装填する役目である。
高性能の改造火縄銃は銀を混入させた鉛玉を使用している。

愈^{いよ}愈^よ、怒^い氣^きを呈^{しやう}した孫悟空、鉛玉を一つ一つ金箍棒で打ち散らす――銃創から血玉を垂れる姐己^{いせ}を護衛する。

「どうも、姐己さん」

筒井の忠臣、島左近は、負傷した姐己へ向けて猛壬那刀を鋭く打ち構える――”奔「パンツ」”――脇見をした孫悟空の体軀へ火縄銃の鉛玉が命中。

傾倒した体軀は大地に泥玉を散じる。

「孫悟空さんが真の無双ですか?」

白銀に煌く猛壬那刀で威迫をする島左近。

「それがし実は、孫悟空さんのファンです。良いですか?」

「訊くには及びません。おれの仲間になりました」

「それはできません」

「御仁は日和見の下僕のようなのですからどちらでも良いのでは?」

「だめです」

「左近殿、おれも無双で良いですか?」

「ええ、良いですとも」

上方へ” 颯「ヒュウッ」”と跳び上がる孫悟空——金箍棒を” 颯「シューッ」”と振下す——島左近は閃避——亦たしても中段より” 日崩「シューッ」”と斜めに打ちかかる——間隙を取る島左近——孫悟空の虎皮の腰布を” 颯「シュッ」”と刻み込む。

勁を成す島左近の体軀を支える震脚は大地の泥玉を弾いた。

「わあ、パンツが」

(ラララララ)

——姐己の携帯電話から倅田來未の音楽が流れる。

「オッス、松永ちゃん。ええ？ 堺が陥落したですって。何やってんの」

「三好め」

「どうしようかな、悟空」

「此方は此方で勝手にやりますぞ」

「いざとなれば上杉のケンちゃんが悟空を助けに来るって言ったよん」

「あの御仁は北朝方ですし、忙しいようですけど……」

――越後の虎、上杉謙信は、北条方である下総の千葉氏方の原氏の居城である臼井城に布陣していた。

上杉氏の同盟相手である守谷城（茨城県）の相馬氏は整胤に対して治胤がクーデターを起こして家督を継いだ。

平安時代より相馬御厨は土地の権利を廻って抗争が続いていた。

ナウマン象と竜神の伝説を持ち、内海に注いだ印幡浦では、洪水に因る水害より悩まされていた。

越後の謙信は昨年より冬営して下総の臼井城に対して攻城を続けていた。

臼井城に籠城する交戦相手である原氏の軍師、白井入道浄三は赤鬼の異名を持ち、三好三人衆の側に立つ。落城はあと一歩手前であった。

「よし、皆の者、一斉突撃」

法螺貝、勝どきの声が響き亘った。

城兵の僅少である臼井城の城郭へ蝟集して水堀を埋めて梯子を立てた。

梯子を登る謙臣が見上げた刹那、オロチ軍の木曾義仲が矢倉の上か

ら長弓を構えて待ち受けていた。

義仲の推参に対して狼狽した謙臣、「な、何だって――――!?」

感激しながら長弓の弦を引いて構えた義仲、「謙臣殿……」

オロチ軍の木曾義仲は放浪中の身で南朝方と結託していた。

―――直江兼続はかつての義仲の重鎮である樋口兼光の子孫であった。

大和国では島左近と孫悟空が鏢迫り合いを続けていた。

新陰流の無常の位は孫悟空の所作に合わせて刻々と変化した。

(島左近、この御仁は強すぎるわい)

愈^{いよいよ}愈^{ザーザー}、糠雨は”嘩嘩”と大降りに変じた。

双方の甲冑は雨滴で濡^{じゅせん}染した。

雷光が煌き、烈風が轟々と舞い上がる。

(ヒューツ)

口笛の合図に呼応して、――猪豚蛇、猩々、鉄鼠、蛟、野槌、金鬼、水鬼、風鬼、修陀、仙狸が、現れた。

”嘩「バサリ」”

出現する猪豚蛇、猩々、鉄鼠、鼠、蛟を方天画戟で次々に真つ二つに斬る。

「ハアーツ、謹^{つし}んで乞い願わくは司命天尊——天地玄黄、宇宙洪荒、日月盈昃、晨宿列張、趙錢孫季、周吳鄭王、馮秦猪衛、羌沈韓楊——太上老君、——勅、勅、勅」

孫悟空の唱えた呪術に拠って、妖魔たちは幾度も再生した。

貂蟬と高順の二人は妖術兵長を探しに向かった。

陳珪の火縄銃は水滴で濡染して、最早、扱う事が出来ない。

「貴様、孫悟空とやら。我の義娘に対して何をするか？」

——陳珪が養女に迎えた三蔵法師に対して山麓の中で暴行してた下手人はオロチ軍の李確^{りかく}と郭多^{かくし}であったが、しかしながら、義父である陳珪は孫悟空の仕業であると勘違いしていた。全く誤解であった。

「御老人。陳珪さん。わたしに対して濡れ衣を着せてはいけません」

陳珪の構える火縄銃を金箍棒で”夏「バキッ」”と打ち壊した後で姐己の様子を伺った。

「大丈夫」

堪えながら起立した姐己は波動を発する”妖玉”を回転させる。

先程の報復として陳珪へ向けて妖玉を”戛「ガンツ」”と打擲する。

「助けてあげる、義父上」

義父の陳珪を救出する為に水袖を広げる三蔵法師は妲己に対して挑む。

水袖が妲己の体軀に当たる寸前——金箍棒で堅強に食い止められる。

「師父（師母）よ。よくぞ申されました。今迄よくぞ耐えて下さいました」

「ええ？」

——生まれて初めて耳にした懇情溢れる孫悟空からの優しい言葉。三蔵法師を取り囲む薔薇の花園は繚乱と咲き乱れながら甘い芳香を放った。

「普段は誰ぞより守らるる事を只、待ち構える師父（師母）が、自ら戦わんと申されました」

——頬を紅潮する三蔵法師の瞳は星斗ほしの如く煌々（こうこう）と輝きを増した。

「ええ、あたしも偶たまには戦うのよ」

「実は師父（師母）に対してやる気を持って頂く事を私は久しく切望致しておりました。貴女が滅法、日和見なものですから、私は常に苛苛しておりました」

「北朝にするか南朝にするか少し迷っていたの」

「師父（師母）よ。北朝だか南朝だか浣腸かアドレス帳か九官鳥だか、派閥についての云々と議論ができる時世ではございません。それ故にオロチ軍の誤りについて私はとうの昔に気付いておりました」

「悟空：わかってくれたのね？」

「噫、^{おお}噫、^{おお}わたしは誠に申し訳なく慙愧^{ざんき}の想いで心痛の至り…」

改悛の情を示した孫悟空は久闊の詫びを繰り返しながら赤目からポロポロと涕涙した。

布巾を差し出した三蔵法師、

「判ったなら泣かなくてもいいのよ」

「私が判って頂きたい事とは…：師父に対して大人になって頂く事です…：わたしは身を焦がして久しく待ち望んでおりました。実は貴女の事を…」

——何と案に相違して三蔵法師へ愛を告白。

从来（今迄）の三蔵法師、幾度も一方的に愛を告げて桃身の姿態で

寝台へ誘って必死に求め続けていた。その都度、必ず、孫悟空から――唾棄されて、遁走されて逐電されていた。

接吻^{キス}どころか会話を成す事も身体の傍らに近寄る事も一切、許されなかった。

だが、到頭^{とうとう}、念願が成就したのである。

一陽来復、春^{きた}、来る。

気色を直してホクホク顔の三蔵法師。

「悟空、あたしに大人になってほしいって何？」

「貴女に大人になって頂く事とは、ええっと師父よ、今後の二人の甘い夜の相談をしましょう。房中術とか」

強引で大胆すぎる科白^{せりふ}に対して戸惑い、赤面して春情を呈した三蔵法師。

縋^{しゆす}子織りの腰布は雨滴のみならず孫悟空の柔らかい美声を聞くだけで熱く濡れた。

「今後の甘い夜って……まあ、悟空ったら、うふふ」

（姐己さんや卑弥呼さんと同じ様に、あたしも抱いて貰えるなんて）
（心の準備が……ああん、どうしよう）
（新しい下着を買わなくっちゃ）

「貴様ッ、本気にしなさるとは」

「え?」

” 戛「ゴンッ」 ”

金箍棒で打擲を受けた三蔵法師の体軀は濡湿する泥地に横転をしたので壮絶な泥塗れの姿になった。

泥地から遮二無二、這い上がる三蔵法師に対して孫悟空は金箍棒を突き出しながら威嚇する。

「貴様、この野郎ッ。妲己殿や卑弥呼殿に対して、あの様な举措であるとは全く心得違いである。謝罪したまえッ」

怒気を呈した孫悟空の閻魔の如き剣幕に対して震え上がる三蔵法師は涙を流す。

「悟空。どうやったら、どうやったら、あたしを愛してくれるの?」

「……」

携帯ゲーム中の妲己に対して、金箍棒で三蔵法師を脅す。土下座をさせる。

困惑する妲己は孫悟空に対して必死に宥めながら止めさせようとす

る。

「……すみません。姐己さん、申し訳ありませんでした」

「よし、行きますぞ、姐己殿」

孫悟空は喜色満面、姐己の白い身体を力強く抱えながら”廳「シュウツ」”と高く跳び上がる——筒井城内へ退却。

大雨は悉く止み終わったので曇天は日輪を現した。

義父の陳珪は蒼白を呈した。

”無い夢を追わす”——その意味は。齊天大聖、孫悟空の目的は——三蔵法師に対して囹オトリとして利用して姐己と卑弥呼を救い、庇護をし続ける事なのである。

それ故、三蔵法師に対して親切に振る舞う事も過去に度々あった。

——大和を奪取する筒井順慶を見限る武将は数多し。

盟友の島左近も跡継ぎである養子の定次を見限る運命であった。

——柳生新陰流の創始者である柳生宗厳が筒井城の虎口から出陣した。

新陰流の創始者である上泉信綱より印加を受けて日の浅い柳生宗厳は過去に大和の筒井家へ出仕していた。

筒井家より娘を娶った後に反旗を翻した柳生宗厳は生駒の松永久秀へ寝返った。

孫の利厳は島左近の娘と縁組をする。

「筒井殿、御覚悟」

筒井順慶へ向けて大太刀を上段の位に構える柳生宗厳——”廳「シューッ」”と斜めに振上げる——”轟「パンッ」”——遠方より赤兎馬に騎乗しながら火縄銃を構える呂布が”轟「パンッ」”と柳生宗厳へ向けて再度、打ち放つ。

「ウわあッ!!……あの距離から?馬鹿なッ」

——大太刀を構える柳生宗厳の拳の端は鉛玉で穿^{うが}たれた。

「呂布殿、加勢に参った」

黄巾の張角が馳せ参じた。

「おおッ、張角殿」

「呂布殿、加勢に参った」

蜀軍の盟主の劉備玄德も、雌雄一体の剣を掲げて参上。

「劉皇叔、よくぞ、来てくださった」

「陳珪さんの一大事ですからな」

——合戦の惨劇の後、敗戦を喫したオロチ軍の孫悟空の屍塊は血塵を啜る大地の中へ散じた。

筒井順慶は無事に筒井城と多聞山城の奪取ができた。

戦国軍の盟主である美濃の織田信長は今回の筒井城戦について、オロチ軍の側に加勢をせんと準備を進めたが、家臣の豊臣秀吉より説得を受けて足止めを受けた。

下総の臼井城で交戦をした越後の上杉軍は敗走した。

堺の茶人、松永久秀は魔性の魅力を持つ。

越後の謙信のみならず美濃の信長も松永に対して魅かれていた。

畢竟、守護や公家の側から国人側に対する一時的な勝利を得た順慶は風前の灯でありながら健闘をした。

三好長慶の死亡が公表された。

三好氏の過去の主君である官領家の細川氏の中立を死守する姿勢は、古代の呉の孫権に通ずると謂うべきであろう。

落ち着いた貂蟬、

「三蔵法師さんって私に、ちょっと似ていたわ」

と、悄然とした表情で呂布へ語った。

三蔵法師を見ていると自分の惨めな娘時代を想起した。
それを夫へ話す事すら、辛い話であった。

「貂蟬、どうして？」

「え、ええ……っと」

筒井城の建つ大和から西進して河内との境に険峻として生駒山地が立ち並ぶ。

乱世の梟雄こと松永久秀の根拠地である生駒の地に巍峨として聳え立つ信貴山は、高野山に比肩する真言密教の大霊山であり、木沢長政が山城を築城した後に松永久秀が改修して四階櫓を備えた。

信貴山の山城に建つ祭壇では香炉から濛々と紫煙が立ちこめて妖壺を包み込む。

祭壇の妖壺の中身は反魂香が入っている。

松永久秀は腕組みをして妖壺の前で呪文を唱える妲己の姿態を凝視した。

呪文が済んだ後、――妖壺の中から生氣に満たされた孫悟空の五体満足の肢体が現れた。

眼前で現実に行われたマジックショーについて、啞然とした松永久秀はからくりであるという信念を持って唇の隅で嘲弄をする。

しかしながら、彼のその強靱な信念は強い時と弱い時との双方を兼ね備えた。

――一星雲は陰り、深静とした夜天の刻。
陳珪の屋敷の外が騒然とし始めた。

「何だ？」

目を覚ました呂布、陳珪の布団を揺さぶり起こさんとするが布団の中は空。

――屋敷の外に出ると曹操の声。

煌々とした篝火の光は呂布の顔を映照した。

（呂布。我々、連合軍はこの屋敷を包囲した）

（神妙にせよ、呂布）

（貂蟬の命は助けてやる）

多勢の連合軍が屋敷の周辺を取り囲む。

拡声器を抱えて説得を試みる曹操の横に陳珪の姿。

「このお、陳珪。裏切り者。貴様が間者だったとは」

「アハハ、悪く思うな、呂布」

「畜生」

――連合軍によって拿捕された呂布は侍所へ連行を受けて評定所で獄門の沙汰が下った。

（終）

※作中の孫悟空の祈禱句は魯迅の小説より

※元ネタは小学館文庫 白土三平 カムイ外伝4巻

※後書きがあります

※元ネタはカムイ外伝2部。同じネタで忍者ハットリくんの小説もあります。↓ <http://nk.syosetu.com/n86630/>

*****雑談1*****

三蔵法師だけではなく作者(松山義人、女)の経験談とは。

昔、松山義人の祖母の住む旧部落地域の実家へユーターンをした。つまり私は池沼の仲間なのです。

学校に粗暴な男子生徒たちから私は彼れ^か此れ^こと因縁を受けた。

池沼の中に男子生徒の「孫悟空」がいた。「孫悟空」には相棒の美人の女子生徒「三蔵法師」がいた。

旧池沼地域の中で、私の実家の最短距離の公民館の看板名が池沼専用の地名。

松山義人の実家は池沼専用の苗字であるが、片側の親が郷土の子孫である。

実家の地元には格の高い真言宗の寺院があったが、廃仏毀釈で廃寺になった。

昔は、教職員が池沼から集団リンチを受ける事件が各地で起きていた。

*****雑談2*****

戦国無双2エンパの話。新武将に「カムイ」を設定しました。

「筒井順慶」の勢力でプレイをした。（新武将のカムイは隣の三好長慶勢力に勝手に仕官）

三好長慶との間で戦が始まった。何と、新武将カムイが戦闘中に筒井順慶勢力へ寝返りました。

筒井康隆は学生時代に15冊位読みました。

何とこちらの筒井さんは「魚籃観音記」という小説で、童貞歴一千年の孫悟空と観世音菩薩（女性）とのエッチな初体験の場面を書いていらっやいます。

普段の筒井は高尚なのにどうしたんだろ。

プレステの西遊記の恋愛ゲームSYKは買う予定はなし。女の子の三蔵法師が孫悟空たちとの恋愛を成就させるゲーム。

エンディングでは孫悟空が三蔵法師の告白に対して「お前はおれの傍にいろ」と答える。二人は結婚。めでたしめでたし……だそうです。

2010年から中国のテレビ浙江這家公司が製作、放映したドラマ「西遊記」で三蔵法師のベッドシーンやら孫悟空のラブシーンをやっているそう。

1980年代の中国製作のドラマ西遊記（六小齡童主演）は呉承恩の原作に忠実な内容のドラマですが、玄奘三蔵の情けない事を言う場面は、変更されていました。

諸星大二郎「西遊妖猿伝」でも孫悟空のラブシーンがあります。

私は全巻持っています。

*****雑談*****

吉川英治の「新平家物語」では木曾義仲を巡る葵と山吹との熾烈な女の戦いの場面があります。

****雑談****

今回の小説「筒井城の戦い」の元ネタのカムイ外伝は成人向けのエッチなエピソード。

元ネタ原作通りにすると三蔵法師が呂布へ「フェ○チオさせ」と頼んで陳珪には「男してー」です。
カムイ外伝でも柳生新陰流が登場します。

小咄（郭淮、張コウ、司馬懿、張春華） ※芭蕉扇を使って…

（パタパタパタ）

張コウ、「今夜は焼き鳥にしよう」

焼き網の横から団扇ウチワを扇あおぐ。

（パタパタパタパタ）

張コウ、「良い匂いだな」

郭淮、「キヤーツ」

悲鳴を聴いた張コウが郭淮を見ると丸裸の格好である。

張コウ、「クールビズ？節電でもしてんのか。伯済は……」

赤面する郭淮、「違います。張將軍様。俺の服が勝手に飛んで行き
ました」

張コウ、「何でまた」

郭淮、「その団扇が原因です」

張コウ、「如何にも、これは芭蕉扇だが」

郭淮、「芭蕉扇で扇ぐと風が吹いて服が飛び、裸にされてしまうらしいです」

張コウ、「非科学的な…。信じるもんか」

郭淮、「試してみます」

（パタパタパタ）

――何処からか” 颼「ヒューッ」” 吹いてきた颼^{かぜ}が張コウの衣裳を吹き飛ばす。

張コウ、「ワッ…：…本当だ」

曹洪、「その芭蕉扇を俺にくれ。何でもするから」

張コウ、「ええい、くれてやる」

曹洪、「ヤッホー」

――1時間経過

頭にタンコブだらけの曹洪、

「人通りの多い市場へ司馬師と一緒に行った。そしたら司馬師の目玉が飛び出しちゃってさ」

司馬懿、「〵〵ワシには芭蕉扇なんて要らぬ。そのような話ばかり熱中せんで良いわ」

郭淮、「奥様の張春華様とは如何な馴れ初めでした？」

司馬懿、「……あれは我が若年の頃の事……」

※※※※※※※※

——司馬懿が仕官もせずに屋敷で静居していた頃の話である。

ナンパが切っ掛けで付き合い始めた相手の張春華の屋敷に呼ばれた。

司馬懿、「張春華。僕たち良いムードだね」

張春華、「仲達さま。私、汗をかきました」

司馬懿、「着替えたらどうですか？」

張春華、「では、ここで着替えます。仲達様は此方こちらを向いて見て良いですよ」

(ゴソゴソ……)

——着替え中の張春華は悩ましい全裸の格好になる。

張春華、 「仲達様……」

司馬懿、 「首から下だけ貴女の側を向いていたよ」

（終）

小咄2（諸葛亮、トウ艾） ※子供の頃のトウ艾の話

南中の象は鼻で筆を扱い、絵画や書道の特技を持つ。

孟獲から聞いた話では——南中の象たちがサークルを結成した。
諸葛孔明総受けの同人誌を発行する予定である。

諸葛亮、「こんな内容の本だと良いな」

※※※孔明の同人誌※※※

荊州に居た頃の話

トウ艾（象）、「孔明兄ちゃん。僕、汗をかきました」

孔明（象）、「土載（トウ艾）。シャワーを貸すよ。脱いで下さい」

（ザーッザーッ）

孔明（象）の鼻の穴でシャワーを浴びるトウ艾（象）。

トウ艾（象）、「サッパリしました。有難うございます。孔明兄ちゃん」

孔明（象）、「どう致しまして。腹がすいたから何か食わないか？
何が良いか？」

トウ艾（象）、「食べ物なら何でも有り難いと思います」

財布を取り出した孔明（象）、「小僧（象）寿司へ行って特上を2つ買って来てくれませんか？」

涙を流すトウ艾（象）、「有難うございます。お礼参り……じゃなかった、お礼は必ず致します」

孔明（象）、「士載。もし将来、君が私に仕える事になれば……ハナでこき使ってあげますぞ」

トウ艾（象）、「はいッ」

孔明（象）、「もし、君が私の好意を”足でフミニジリ”、裏切る事があれば今後は”ハナ”であしらいますぞ」

トウ艾（象）、「はいッ。分かりました」

少年時代のトウ艾（象）は孔明（象）の重々しい（体重が）雰囲気に対して畏敬の念を抱いていた。

（終）

小咄3（張飛（♀）、張コウ（♀）、郭淮） ※芸能界本日モ反省ノ色ナシ

アイドル歌手の張コウ儁父（♀）と張飛翼徳（♀）はライバル同士。

張コウ儁父はブリッコ娘路線。

張飛翼徳はツッパリ少女路線。

対象的な二人について、業界の各芸能ニュース誌は競って興味本位な記事を書き立てた。

張コウ儁父より年齢の若い張飛翼徳は遅れてデビューしたが「少年A」でCDの売上がオリコンで張コウ儁父の記録を抜いたので、一躍、トップスターの座に躍り出た。

大ヒット曲「少年A」は少年犯罪に関わる裁判をテーマにした音楽である。

未成年の犯罪者に対する死刑の廃止を訴える音楽「少年A」は蜀漢の人民の魂を大いに揺さぶった。

（ラララ〜少年A〜）

（ラララ〜有罪判決〜）

（今は〜裁判員は〜誰だか〜判らん〜）

二年連続でレコード大賞を受賞した張飛翼徳はライバルの張コウ儁父を大きく引き離したかのように見えた。

———芸能事務所「曹魏」

張コウ、「家柄が良すぎる俺は敵を作り過ぎた。もうだめなのだろうな」

マネージャーの郭淮、

「マモデルとして活躍する方法もあります」

芸能レポーターの曹洪、

「ニュースだ。貴様のライバルの張飛翼徳が風呂場で”他殺未遂”事件を起こしたってさ」

張コウ、「他殺未遂？」

張飛翼徳には二人のマネージャーがいる。

張達と范彊である。

——芸能事務所「蜀漢」

張飛、「オイッ。張達。范彊。マネージャーだろ？俺の言う事を聞かないと風呂場でバラバラに解体して殺してやるぞ」

張達、「ワッ」

范彊、「ヒッ」

（終）

小咄4（呂布、夏侯惇（♀）、夏侯楙）

※風俗モノです

（パチパチ……）

只今の呂布は風俗店”インターネットノーパン喫茶”内のパソコンを利用してブログを書いている。

風俗店でありながらインターネットも可能な便利な店である。

「いらっしやいませ。犯罪利用は当店ではお断り」

呂布、「あれ……夏侯惇？店員のアルバイトやってんの？」

夏侯惇、「貴様はオレオレ詐欺か？」

夏侯惇は呂布が使用しているパソコンの画面を指差す。

夏侯惇、「”サギ”って書いてるじゃん」

呂布、「よく見ろ」

夏侯惇、「貴殿はブログに”日本の住宅はウサギ小屋だらけ”と書いてただけか……誤解して済まなかった」

呂布、「仲直りしようぜ。触って良いかな。スカートの下を」

夏侯惇、「えゝ？」

呂布、「夏侯楙を誘拐した。食べ物で釣ったから簡単だった」

※※※回想※※※

夏侯楙は許昌の屋敷へ出先から戻った。

「ただいま。お腹すいた。あれは何だ？」

応接間のテーブルの上に饅頭が置いてある。

「うまそう〜あれッ？何か札があるぞ」

饅頭が置かれた皿の横に札が置いてあるのを夏侯楙は発見する。

”コノ饅頭ハ毒入り危険”

「危険」と書いてある。この饅頭を食べたら確実に死ぬのだろう
……でも、食べよう」

（パクパクパク）

「うっ……………」

（パタン）

呂布、「しめしめ…………ばかめ」

※※※※※※※※※※

呂布、「という訳で簡単だった」

夏侯惇、「ばかな……夏侯楙が」

呂布、「スカートの下を触らせたら夏侯楙を返すよ」

夏侯惇のスカートの中から血鮮が大量にポタポタと下肢の間を滴り落ちる。

呂布、「声を出さんのかッ。痛くないのかッ」

夏侯惇、「……」

呂布、「よく我慢したな。親切に教えてあげよう」

夏侯惇、「何を？」

呂布、「ほら、あそこに霊がいるぜ」

「呂布様こんちわっ。俺も女体化しました。俺にもして下さい」

袁術配下の紀霊（♀）が挨拶をする。

「俺にもお願いします」

高順（♀）も挨拶をする。

「俺が先です」

張バク（♀）も来た。

呂布、「皆さ〜ん列になって順番に並んで下さ〜い……俺は医者か」

「……」

夏侯惇は慌てて店を出た。

（終）

小咄5（呂範×孫策）

※ラブラブ路線です

” 嘩 [グチュ] ”

” 嘩 [グチュ] ”

” 嘩 [グチュ] ”

孫策、 「あーん。 呂範。 いいよ……素晴らしいよ」

呂範、 「まだやりますぞ」

” 嘩 [グチュ] ”

” 嘩 [グチュ] ”

” 嘩 [グチュ] ”

孫策、 「いいよ、 いいよ。 呂範殿……」

本日は孫呉の毎年恒例の「リング握り潰し大会。」

トラック一杯に集められたリングを呂範は次から次に握り潰す。その様子を見た孫策は感心して眺めている。

” 嘩 [グチュ] ”

” 嘩 [グチュ] ”

” 嘩 [グチュ] ”

呂範、 「まあ、 今年の” リング握り潰し大会 ” の優勝者は俺に決定だな」

孫策、 「良かったよ。 もっと続けてくれ」

(終)

小咄6（島津忠恒、亀寿）

※悲しき夫婦

鹿児島県の錦江湾に浮かぶ桜島が本土と陸続きになるのは大正時代の大爆発以降である。

（ブリブリ……）

（ブリブリブリッ）

（ブリブリブリブリ）

（ブリッ）

（ブリブリ）

義弘、「汚いぞ。又八郎（忠恒）。正露丸でもやろうか」

忠恒、「いえ、父上。腹をこわしたのではなくて」

東郷重位、「我が藩で養殖業を始めたので」

忠恒、「ブリの養殖です。あっちにもこっちにも”ブリ（鰯）”が
沢山泳いでいるなあと……あッ」

亀寿、「あんた……」

忠恒、「オエーッ、ゲーッ。ゲーッ」

義弘、「又八郎。ブリの次はゲーか。汚いぞーッ」

東郷重位、「若様。奥方の御前で失敬な」

——琉球へ海水浴をする為に家族で高速フェリーに乗船している。

忠恒は船酔いしたのである。

（終）

小咄7（董卓、呂布） ※麗しき師弟の愛

洛陽城の呂布は二人の娘を持つ。玲綺の妹、次女が誕生したばかりの頃の話である。

呂布、 「董卓様。娘が生まれました」

董卓、 「ほく。良かったな」

呂布、 「名付け親になって欲しいんですが」

董卓、 「どんな名前ならいいんだ？」

呂布、 「倭人みたいな名前が良いかな」

董卓、 「倭人みたいな名前？」

呂布、 「一番下に”子”を付けると倭人みたいになるという話です」

董卓、 「陳子^{チンコ}はどうだ？」

呂布、 「それはちと…」

董卓、 「満子^{マンコ}はどうだ？」

呂布、 「それも困るかな」

董卓、 「では、運子^{ウンコ}はどうだ？ラッキーだろ」

呂布、「もう、真面目に答えて下さいよ」

董卓、「穴子^{アナゴ}」はどうだ？」

呂布、「それは魚の名前でしょ」

董卓、「圧電素子」はどうだ？電気製品を動かす便利な名前だ」

呂布、「フンッ。じゃあもういいですよ」

（終）

小咄8（韓遂×馬超） ※ラブラブ路線です

「ああ〜ッ何をするか〜」

馬超の衣裳の上から韓遂が両腕で静かに撫で回す。

「ああ〜ん。はアアッ」

馬超の衣裳が韓遂の腕で優しくたくし上げられる。

（ハア……ハア）

韓遂の吐息が荒々しくなる。

「孟起……。俺はもうタマってるんだ」

「アッ…アア…ッ、韓遂様。アア〜ン」

「……やっぱり無いか」

「えっ？何、韓遂様」

「俺の財布が」

「えっ？」

財布を紛失したので盗難を疑い、馬超の衣裳の中を調べた。遠方から馬超を見つけ出して慌てて駆け付けたので呼吸が荒くなっている。「タマった」のは紛失した財布の中身の事である。

「韓遂様。財布が見つかりました。ダンス中です」

「おお。有難う。成公英殿。ご馳走してやるぞ。孟起も来てね」

「フンッ」

（終）

小咄9 (郭淮、夏侯覇、賈南風) ※ほのぼの路線です

夏侯覇、「郭淮殿、何をしているか」

郭淮は小さな少女を連れて歩いている。

「親戚のプウちゃんですよ」

賈南風、「叔父さま。あたし、ローターの玩具が欲しいわ」

——郭淮は赤面。

夏侯覇、「それみた事かッ。犯罪でもやってんのか。虐待でもしているのか？電動ローターを使うのか……？」

郭淮、「俺の事が妬ましいから早計したふりをするのか？」

夏侯覇、「妬ましい？ウツキーツ、アンギヤーツ、グエーツ、ガーッ」

郭淮、「言う事はそれだけか？……誤解だと言うのに」

賈南風はローターで動作する”ぬいぐるみ”を郭淮に対して強請^{ねだ}っていたのである。

(終)

※賈南風とは郭淮の姪っ子。伝記の内容は信用できません。女性だ

から差別を受けたかもしれません。

小咄10（劉備、孫尚香）

※漫画キャンディ・キャンディの話

孫尚香、「ねーあれ覚えてる？」

劉備、「何？」

孫尚香、「キャンディ・キャンディで漫画昔あったよね」

劉備、「あれは黄巾の乱の前の頃、盧植先生の学舎の書架にキャンディ・キャンディの単行本が置かれてあった。先生は倭人の文化に対して関心がありでしたので。他に永井豪の漫画も置いてあったぞ」

孫尚香、「……あれね。原作者との間で訴訟沙汰があったってさ」

劉備、「功曹（裁判官）の判決は原作者側にばかり有利な内容だった」

孫尚香、「でも、主人公の女の子は気の毒だったね。テリィと別れてさ」

劉備、「最後にギルバートと結婚したんだよな」

孫尚香、「違うってば」

劉備、「最初から説明すると……。孤児院ポニーの家の馬小屋で生まれた孤独なキャンディはアニーが大事な友達。アニーは養女とし

て引き取り先が見つかって孤児院を去る。後にキャンディも孤児院を出てラガン家に引き取られる。ラガン家で再会した友人アニーの恩知らずな態度に腹を立てたキャンディは棍棒を使ってアニーを打ち殺した。次にラガン家から馬番に任命される。待遇に不服を覚えたキャンディはディナーパーティーで大暴れ。パーティーの全招待客を棍棒で皆殺しにしたキャンディは料理と酒を頂戴して満腹になる。昼寝をした後はアンソニーと乳繰り合って……キツネ狩りの日はキツネの肉をたらふく食べて、また満腹になったからグーグー昼寝して……」

孫尚香、「そうだったかな」

劉備、「ラストね。アードレー家の総長の正体を明かしたアルバートはキャンディと一緒にになってニール・ラガンを棍棒で滅多打ち。州警察がニールを逮捕。刑務所に入ったニールは電機イスへ……。イライザは豚便所に突っ込まれる。

ニールとイライザの正体は実は悪霊だった。キャンディは”父と子の聖霊”の御名で祈りを捧げて悪霊を浄化させた。キャンディは困難に陥る場合、天の聖霊から便利な道具を貸して貰って解決をする事が多い……」

孫尚香、「何の話だっけ？」

(皮肉?)

(終)

小咄11（呂布、張遼） ※トイレの中で……

（ブウブウ）

（カラカラカラカラ）

（ブウブウ）

（カラカラカラカラ）

（ブウブウ）

洛陽城の豚便所の前で呂布はトイレットペーパーを横領中。

崔林の発明のお蔭である。

呂布、「へへへ。これを持って帰れば節約になるぞ」

張遼、「呂布様。何をしてるんです？」

呂布、「お前、いたの？」

張遼、「備品の横領は董卓様が禁じておいです」

呂布、「横領ではない。ミイラ男の真似事をしようと思ってさ」

張遼、「……まあいいや。私も頂いてまいりましょう」

（ガラガラガラ）

——台車の上に12ロール分のトイレットペーパーを載せて運ぶ張遼。

董卓、「張遼。何をしておる？その大量のトイレットペーパーは一体どうしたんだ？」

張遼、「チリ紙交換をしているんです」

呂布、「嘘ですよ。張遼の奴はは、このトイレットペーパーを12ロール使い切って一日中オナるってさ」

董卓、「そんなに沢山トイレットペーパーが要る程、出るのか？…
…張遼はすごいな」

呂布、「これぞ本当の三国志精子ってやつだな。」

董卓、「劉備が”三顧の礼”で孔明の前で”もう我慢できん”とか言って”ピュッピュッ”と……」

――翌日。

（クチュックチュツ）

（クチュックチュツ）

長安城の湯殿に備えられるシャンプーとリンスを呂布が空ボトルに入れて物色中。

貂蟬、「ね、コンドームはないの？」

呂布、「ないッ」

董卓、「誰がコンドームを沢山、使い切った奴がいるな」

張遼、「はい、俺」

（終）

小咄12（張コウ、郭淮）

※張コウと郭淮がストリップ劇場へ

董卓、「今日は市場でストリップ劇場の興行があるから行くぞ」。
張コウと郭淮が一緒に出演するぞ」

呂布「わーい。行きまーすって……あの馬鹿共が」

張遼、「全裸の格好で踊るアレか。――取り敢えず行って見てみましょう」

――長安城の市場に設置された天幕張りの芝居小屋の周辺に数多くの人民が詰め寄せている。

（ガヤガヤ……）

（ワイワイ……）

（張コウ、もっと見せろ）

（サービスはまだか）

呂布、「おっ。張純さんに張拳さん。こんちわー元気？」

董卓、「まーせいぜい摘発されんよう頑張れよ」

――別名”弥天將軍”こと張純が張拳と一緒にストリップ劇場を共同経営している。

——芝居小屋の中に入場すると舞台が始まっている。

張純、「長安城の人民の皆様。おいで下さいまして有難うござい
ます」

張拳、「これから素晴らしいショーが始まります。張コウと郭淮が
出演します。どうぞ……」

（パチパチ……）

舞台の上に登場した張コウと郭淮が客席へ向かって御辞儀をする。

（美しいぞ、張コウ）

（郭淮もいいぞ）

（パイパンにしる）

客席から喚声を受けた張コウと郭淮は羞恥のあまりに頬を染める。

（恥ずかしいがな）

（金を払ってるんだぞ）

張コウと郭淮の二人は手の中に何かを隠している。

（隠すな）

（見せろ）

舞台の上の張コウと郭淮は同時に隠し持っていた携帯電話を取り出した。

（見せろー見せろー）

張コウと郭淮は携帯電話を客席へ向けて高く掲げる。

呂布、「これはストリップショーじゃなくてストラップショーか？」

董卓、「おお、その通りだ」

（おおーすごい携帯電話だ）

（開いて中を見せろーッ）

張コウと郭淮は携帯電話の蓋をパカッと広げて客席へ向けて高く掲げる。

（オオー）

（ウヒョーッ）

（スゲー）

呂布、「馬鹿らしいから帰る」

張遼、「では俺も」

（終）

（※OROCHI設定） 厳島の戦い（義経、孫策）

「アーメン」

荒涼とした大地の中、蝟集する水牛の群集は糞塵を散じる。

鬱然とした翠緑の森林の奥合いに建つ教会の中へ押し込められた大勢の白人の神父、兵卒、女と子供たちが尖叫を始める。映じる嚇々（あかあか）とした業火は教会の壁板の四方から包み始める。

出口は巨大な石塊で塞がれているので脱出は不可能である。

神父は最期の祈りを捧げた。

——上空に暗雲が沸き始めた。

——大海を渡航したオロチ軍は新大陸へ上陸した。

オロチ軍はインディオ（紅人）の地の奪取をする目的の為に各地の新大陸の紛争に対して軍事介入を行った。

オロチ軍はインディオの大衆に対して演説を行い、蜂起を促して最新の武器を与えた。

戦況の結果は芳しくないにも拘わらず幹部の松永久秀の配下の兵卒がポルトガル軍に対して投降する事件が相次いだ。

オロチ軍は報復の為に凄惨な残虐行為を極め尽くした。

——良心的な神父が勤める教会に対して空爆を始めた時の事である。

——突如、暗雲が沸き上がった後で大雨に見舞われる事件が起きた。

コンキスタドール（植民地総督）のオロチ軍に対する報復が苛烈を

極めた故にオロチ軍の遠呂智は幹部の松永久秀に対して帰国の指示を与えた。

南蛮船で帰国した松永久秀はオロチ軍の総本山である備後の大場山城へ向かった。

——新大陸では妲己や孫悟空や張済が残された。

色白の麗人である張済の奥方は妲己と共にインディアン^{インディアン}の救世主として崇め奉られた。

——天幕の小屋の中で——インディオの娘のコヨルシャウキは、葉巻を燻^{くゆ}らす新参者の少女の様子を眺めている。

銀山の労働へ連行されたコヨルシャウキの父親は逃亡を試みて殺害されたが他の家族はオロチ軍から救出を受けた。
新参者の妲己は葉巻に対して病みつきである。

コヨルシャウキは妲己に対して御礼をしたが此^この少女は些^{ちやうど}か愛想が悪い様子である。

オロチ軍の幹部である妲己も月経小屋で他のインディオの娘と共に過ごす。

月経中であればインディオは天幕の小屋で過ごす事を慣習としている。

大海の彼方、邪馬台国の厳島（※広島県）でも類似する掟を持つ。

――邪馬台国の大名、安芸の国人であった毛利元就は大内氏より離反した後で、オロチ軍と組した出雲の尼子晴久に対して頭を抱える。

――倭国の居留地に住みついた回教徒は因幡国（鳥取県）の砂丘の中にモスクを建て、駱駝ラクダで交易をしたり、又、石見銀山まで遠出をして鉱夫として就労する者もいた。

回教徒たちの勢力を手中に収めたオロチ軍は出雲の尼子国久と結託して同盟を締結した。

オロチ軍は尼子氏に対して援軍を派遣していた。

昨年、尼子国久は甥の晴久より処断を受けた。

因幡守護代の尼子晴久は多くの配下の武將を失った。

山吹城が要所である石見銀山（島根県太田市）はエルサレムの如き係争の地である。

石見銀山はオロチ軍の加勢を受けた出雲の尼子晴久から幾度も奪われ、その度に大内氏が奪取し、今では尼子晴久とオロチ軍が共同で所有する。

――大場山城（広島県福山市本郷町）のオロチ軍の居館に構える遠呂智は、配下の弁慶を招聘した。

「弁慶よ、次の仕事は」

「はは、遠呂智様。」

「松永久秀と協力して尼子晴久の領地で出雲の回教徒の一揆を扇動するのだ」

「承知。では、尼子晴久との同盟は撤回という事で？」

——遠呂智は尼子晴久に対する支援を絶ち、毛利元就と組む予定である。

弁慶は、源義経の居場所を求めて諸国放浪の途中、オロチ軍に加わった。

だが、弁慶の慕う源義経は現在では北朝方へ鞍替えをしたので、オロチ軍にとって複雑な立場である。

義経の代わりに同族の木曾義仲が南朝方に立場の近いオロチ軍へ助っ人として加わっていた。

張繡、「遠呂智様、斥候の胡車兒から毛利軍と陶軍が厳島で交戦するとの知らせ」

遠呂智、「張繡殿、御苦労」

張繡、「陶軍には呉の孫堅軍が援軍として参戦するとの情報が。如何なさいます？オロチ様」

遠呂智、「我々は毛利軍へ寝返り、援軍を送る」

董卓、「よし、暴れるぜ」

遠呂智、「松永久秀と弁慶には、出雲の回教徒に対する一揆の扇動の任を命じる」

平清盛、「遠呂智様、それがしも出雲へ参る」

松永久秀、「おお、清盛殿も同行して頂けるとは」

安芸国の宮島口（広島県廿日市市）から連絡フェリーを使用して宮島へ渡る。

宮島こと厳島は、弥山が峻厳に聳え、浦風が靡き、神鹿が跳舞した。弥山の山麓よりロープウェーを使用して弥山の山頂へ辿り着く。対岸の安芸草津城と、厳島の北西に建つ宮尾城で毛利元就が本陣を構える。

一方、陶晴賢は厳島の塔に本陣を構える。

采配で指示を与える陶晴賢は、尼子晴久の援軍の到着を待ち詫びる。

「一大事、一大事」

「如何した、孫堅殿」

呉軍は陶軍と同盟を組んでいる。

「尼子の地、出雲の回教徒が一揆を起こしたとの知らせ」

「孫堅殿。んーやはり、尼子晴久の援軍は無理か。元より期待できぬ状況であつたが。」

「他に毛利方より寝返りの打診があるようですが、見え透いた罠と思われます」

「後は孫堅殿が頼りである」

「このような戦は得意中の得意で」

この度、陶晴賢の救援に参じたた呉の孫堅は稀代の提督であり、毛利の水軍であつても敵うまいとの大方の予想であつた。

奢侈に目覚めた大内義隆に対して陶晴賢が処断を加え、独立した。安芸国の国人である毛利元就も主君を失って独立した。

——その頃の出雲では、平清盛と松永久秀と弁慶の三人が、尼子に対する回教徒一揆の扇動を成功させていた。

（尼子は十字軍の仲間） という流言が在留回教徒たちの間で広まった。

——怒り狂う回教徒たちは蝟集し、出雲の尼子の居城や寺社を焼き討ちにした。

石見銀山の要所、山吹城は回教徒より占拠を受けた。

『ジハード』を唱える回教徒の群集たちは、山陰道を進み、尼子晴久が構える月山富田城を目指した。

（いざ、レコンキスタの雪辱を晴らさん）

松永久秀、「清盛殿、厳島では毛利元就殿が苦戦との知らせ」

——蒸気とスクリュウの動力で推進する呉軍の戦列艦は瀬戸内海の中を邁進する。

ドカーン
轟

戦列艦が放つ大筒の砲撃で毛利元就軍の士気が低下した。

援軍の村上水軍は既に壊滅していた。

平清盛は出雲で足止めを受けていた。

「孫堅か——やるよのう。こちらでも負けていられぬ」

出雲大社は通行止めで向かう事が出来ない。

南蛮人の屋敷を選び、平清盛と松永久秀は出雲の地から共に、祈祷

を始めた。

南蛮人の僧侶も十字を切り、協力して一緒に祈る。

――夜半、出雲の地から遠く離れた厳島では――神風がゴーツと吹き荒れ、水嵩が増し、厳島は蓬莱島の姿に変わる。

大筒の砲撃は停止、転覆した呉軍の戦列艦は瀬戸内海の沖合いへ流された。

平清盛、「祈祷の力は遠くからでも伝わる」

松永久秀、「流石ですね」

――キリスト教会は必ずしも北朝方ではなく、教義の内容は念仏宗に類似した。

平清盛、

「過去の大乱の末裔が信濃のみならず厳島へ集結するとは縁えにしの如きである。その逆の縁えにしは何処いずこにあるか」

何を以て縁起であり、逆の縁起であるか？

戒律と学問の内容を分割する事で、瀬戸の大海の様に、嘘付きが滅びて、何もかも透明になるとあろう。

――明朝が南宋の様に復興したのであれば北朝側が勝利を得る事も出来たのである。

――夜明けの厳島は、対峙する陶軍と戦列艦を失った孫堅軍との間で、戦況が膠着している。

瑩然と光る大海を孫堅の呉軍は彷徨い、毛利軍を追行した。

赤濁する大海は恰も^{あたか}月経の如きである。

塩分の濃さは女性の丹田の奥、羊水の濃さと一致する。

新大陸の住人は、潮汐を齎す星の運行を熟知していた。

「貴方、急いで下さい」

海中を掻き分ける大喬の後を遅れて旦那の孫策が追う。
バテレンの洗礼を受けた大喬は夫の孫策が愛してくれると健気に信じていた。

（済まん、大喬。あなたの御神籤が大吉であろうとも）

（妲己の事が忘れられん）

旦那の孫策は妻に対して心で詫びる。

オロチ軍から呉軍へ、連れ戻された後の孫策は情熱を失っている。

『偽者の孫策ではないか?』と揚州の人々の間で評判である。

——厳島へ上陸した呉軍は、毛利元就の構える本陣の宮尾城へ辿り着いた。

「孫堅殿、加勢に参った」

「おおー——源義経殿。よくぞ来てくれた」

援軍として馳せ参じた牛若こと源義経は色白の筋肉に輝煌する甲冑を身に纏う。

武雷の小手を大きく拝舞をして宮尾城に構える毛利軍を威嚇する。

『鎌倉の本体の武士』の異名を持つ梶原景時は義経の後から従い、馳せ参じて陶晴賢に対して会釈を行う。

木曾義仲と同様にして仏神を恐れぬ男という評判を持つ孫策は全く生気が欠けている様子である。

(これが呉の小霸王である孫策の姿なのか? 信じられん)

(それ程までに姐己殿や卑弥呼殿の事を愛しておいでは)

「まあいいや、皆の者、気を取り直して」

出雲の回教徒の騒乱は、尼子晴久が群集に対して得意の笛の音を披露して鎮めたのである。

「我也やってみるか」

義経は琵琶の弦を弾き、奏じた。

「キーキーガチャガチャ」

「音波攻撃だ」

「ヒイーツ」

余りに酷すぎる演奏であるので、毛利方の宮尾城の城兵たちが悲鳴を上げた。

毛利方の武将たちのみならず、呉軍の兵卒たちも耳を塞ぐ。

（ギャアーツ）

（ヒイーツ）

（グエーツ）

（助けてくれーツ）

出雲から江の川を渡って安芸より宮尾城へ到着した平清盛は、特に音楽に対して造詣が深く、悶絶しそうになり、蹲うずくまっている。

「ヒーツこれまでか」

宮尾城で采配を振るう毛利元就は、絶望して、半分諦めかけている。

「義経の兄貴！！」

源義経の姿形を発見した弁慶は、宮尾城の矢倉から飛び降りた。

今では弁慶と義経は敵味方の間柄である。

「どうして？義経の兄貴」

「最早、兄弟の間柄ではないわ」

「ひ、ひでえ」

弁慶は愛しい義経と今すぐにも抱擁し、唇を重ねたい気分になった。

二人の様子を眺めた義経の部下の梶原景時は冷笑を浮かべる。

「弁慶殿。ワシがチューしてやりますぞ」

出雲から直行して体力が低下した平清盛は、弁慶の体軀から精気を補給させて貰った（吸生）。

（チューチュー）

「清盛殿。今のそれがし（弁慶）は味方なので、敵さんから精気を貰うと如何ですか？」

「そうとも」

『オーッ』

呉軍の盟主、孫堅が鼓舞を発して連合軍の士気が上昇した。

「バシヤ、バシヤ」

「清盛に対して隙を与えるな。常に動くのだ」

煌めく狼剣を”日崩「シュン」”と揮舞をする孫堅——オロチ軍の張繡の体軀を”嘩「グシャッ」”と切碎、叩き割る。

「おのれッ。貴様の息子も滅多切りにしてくれるわ」

オロチ軍の董卓は獄刀を揮動——旋括棍で抵御をする孫策、強勁に鏑迫り合い——互いに武器を放す。

董卓、孫策の体軀へ上段斜めから獄刀を”颯「シューッ」”と振り下す————”颯「シューッ」”と後方へ跳び退いた孫策の直垂が破けて、全身の生肌が露わになる。

孫策の旋括棍をサーッと奪った董卓、両端を握り————”戛「バキッ」”と二つに圧し折る。

「えい」

大喬、董卓の背後から旋体脚（回し蹴り）————その片足を董卓が片腕で掴み、自由を奪い、大喬の頸元を獄刀で”嘩「グシャッ」”と海中へ掻き落とす。

昇天する泡沫で溢れ、瀬戸内の波間が赤濁した。

旦那の孫策が尖叫、「おのれーッ」

平清盛、間隙を縫い————”日崩「シューッ」”と勁を成した数珠を、孫策の図体へ喰らわす。————安定を逸した孫策は、泡沫を飛散しながら海中へ倒れ込む。

何とか立て直して体軀を屈めた孫策の目前を————”日崩「ヒューッ」”と弓矢が涼過————弓矢は海面を破る。

オロチ軍の木曾義仲が、岩畳の蔭から大弓と葛藤編みの矢壺を抱え、推参した。

平清盛、「木曾殿、助かりました」

同族の誼である義経、「おっ、センサー、久しぶりッスね」

義経へ向けて、矢叫びを吼えて”日崩「ヒューッ」”と射掛けた義仲——矢面へ向けて頭上に琵琶を掲げた義経。

”丁丁「ポロン」”

命中、撃毀された琵琶は”嘩「ガシャッ」”と碎け、海中へ散じた。

弁慶、「義経の兄貴…じゃなくって木曾殿、御見事です」

風上へ廻るよう指示した孫堅の間隙を縫った平清盛が、吸生。

(ゴクゴクゴク)

吸生^{チユ}の必殺技を使った平清盛と木曾義仲は見事に、孫策と源義経を倒し、陶軍を壊滅させた。

この年は歴史的に運命的な事件が多い。

同じ年に、南米ではインカ皇帝のサイリ・トゥパックがスペイン軍に投降した。

フランスとオスマン帝国の圧力によってルター派が容認された。

ザビエルから洗礼を受けて大友宗麟の家臣と共に行動した日本人のベルナルドは、ローマに辿り着く。

厳島の戦いの翌年、大内氏が同盟中の大友氏へ明朝から来客。それと、中国では大地震。

鄭舜功は倭寇の鎮圧を依頼する為に来日したが、キリシタン大名の大友宗麟より軟禁を受けた。

大友宗麟の弟である大内義長は陶晴賢より傀儡として擁立されていた。

大友氏は宣教師の手から南米から産出される硝石を購入した。

（終）

（※OROCHI設定）本能寺の戦い（韓遂、馬超、趙雲、信長）

倭国の村邑に静居を構える陳珪の屋敷にたどり着いた。

「ようこそ馬超様。如何なされました？」

「韓遂か若しくは劉備玄德を我は捜し求めておるのだ」

囲炉裏を一同で相囲む。

和やかに談笑をしながら熱い煮炊きを食した。

長子の陳登の他に養女の三蔵法師が屋敷の庫裏くりの中ではたらいいてい
る。

炉端かの上に胡坐あぐらを構えた馬超は黄酒をのみながら、膝ひざを交えながら、
閑談をつづけた。

旧来の盟友である涼州の韓遂や他の徒党達と共に数多くの成功や失
敗を経験した。

——金塵が一面に散じる河西走廊の茫漠たる荒地は、鈍い陽光を返
照した。

倭国の今の季節では、微かすかに煌めく黄塵が舞いおちる。

僅わずかな酩酊感めいていを覚えはじめた。

芳香の揺蕩たゆたう三蔵法師の華奢きゃしゃな衣裳に対して何事か念仏や譚言を呟
きながら抱擁をした。

「韓遂殿」

「（変態かな）何をしておるね？馬超殿」

オロチ軍から拘引を受けた蜀漢の劉備玄徳の沙汰が知れずにいるので相変わらず孤独で不便な境遇にある。

厚情深い陳珪は劉備の消息が判明する迄の間に大和の地で起居を共にするよう請じた。

「忝かたじけない。しかしですね……」

「え？」

「それがし韓遂殿の事を……」

「えっえっ？」

馬超には追手がいた。

回族の事である。

徳川幕府の入国奉行に対して普請ビザを申請、認可を受けて就労を始めた回族たちは、居留地の中に建設したモスクやミナレットの中で礼拝を行い、巡礼は南蛮船で行う。

倭国は必ずしも手放しで歓待をしなかったたので代わりに遠呂智や姐己に対して信賴を寄せる者が増えた。

西方へ後退したオイラトは虎視眈々と再起の機会を伺う。

我が国の場合では、伊達政宗と武田信玄は競馬を開催して軍費を捻出している。

——大気が揺蕩^{たゆた}う春日に焼畑や樵の仕事をはじめた。そのほかに牧場で馬術や種付けの指導に従事した。

放浪中のころの馬超はアルミ資源や銅資源の回収業の仕事で喰いつないだ。

食料が不自由である場合は市場で物乞いをしたりパンの耳を食べたりスーパーの試食コーナー漁りやコンビニのゴミ箱漁りで飢餓を凌いだ。

沐浴中に回族から襲撃を受けた。

這々の有様になった馬超は今こそ己は愛する韓遂と再会するべきと考える。

（己は一体如何したら良いのだ）

（熱いのだ、文約……）

喉の渴きを覚えた。

（韓遂文約様、逢いたい……）

——此の年にオロチ軍の武田勝頼の残党は連合軍の織田信長より侵攻を受けたので壊滅している。

嘗て、父親を追放した後、信濃一円を手中に収めた武田信玄の生き方は馬超の人生観に通ずる部分を持つ。

――

「ああーッ、馬超は回族の連中からやられましたな。韓遂殿」

戦国軍の盟主である織田信長は今は韓遂と一緒にいる。
茂林の陰から馬超の様子を息を潜めて窺っている。

涼州の韓遂を招聘した美濃の織田信長は、馬超を仕官させるべくして行状について彼れ此れと韓遂に対して詰問を行った。

「馬超は毎日ソーブランドへ行ったりデリヘル嬢を頻繁にコールするんで病気がある事は全く確実なのですが……」

――韓遂はポツリポツリと、盟友である馬超の奇怪な性癖について織田信長に対して語り始めた。

「馬超には女がおらぬのか？」

「馬超の屋敷へ訪問してラブドール（ダッチワイフ）が並べて置かれてあるのを見た事があります。最新の技術を駆使した生きた人間

ソックリの精巧でリアルなもので。あれを見て私はゾ〜ツと……」

「韓遂殿〜。我々戦国軍は何としても馬超を頂くのだ。真面目に話をして頂きましょう」

「真実です。以前、馬超と一緒にストリップ劇場へ行った時の話です。興奮した馬超は”サービスをしろ”と大声で騒ぎ、舞台へ上がつて踊り子の体に抱きついたので大変でした」

——織田信長は舌打ちをした。

「馬超の問題は女だけか？」

「私の所有する金庫に保管していた預金通帳と印鑑が曲者から盗まれた事がありました。あれは馬超の仕業だったかもしれません」

「本当かね、韓遂殿。馬超はイカンな〜」

「まだあります。馬超はカルトの新興宗教に入信してます。スピリチュアリズムとかチャネリングとか。選挙に立候補するとか騒いだな」

「当選するよ」

「あと、黄金伝説の”一カ月一万円生活”に馬超がテレビ出演した時にウンコ入りのカレーを食べてました」

「まあ……よく分かりました。馬超については私達も考えておきましよう」

織田信長は馬超について疑問を持つようになった。

春天から赫奕とした怪光が馬超の佇立する四囲を遍照した。馬超の目前にオロチ軍の姐己が舞い降りて推参した。

「ご機嫌如何？馬超さん」

現れた姐己は身体の線を際立てる悩ましい普段の格好である。崇高な波動を発する異様な光球は紫紺色に煌めいている。

「おお、見つけた、姐己だ」
「やつつけろ」

——回族の出稼ぎ労働者の集団は姐己の姿形を見つけた。

「はい、こんにちわ、回族の皆さん」

——姐己、微笑んで挨拶。

「許さんぞ、姐己。そのような裸同然の服装で」

「戒律を守れ」

——回族は姐己の服装が気に入らぬようである。

「回教徒の繁栄は、伝統に固執しては長続きできないの」

「何だとお」

姐己を目掛けて憤怒とした回族たちの鋤や鍬が嵐の様に押し寄せる。

——陰風が流れ、雷鳴が煌煌と轟く。

白銀色の祥雲に跨る猿猴が出現。

金箍棒を揮動する猿猴、剛勁の怪力で回族たちの脳天を一つ一つ、
”嘩「グシャツ」”と叩き割った。

「うわあああ!!!!!!」

「逃げろ!!!!!!」

回族たちは恐れをなして逃散した。

「ハーイ、姐己さんよ、何故、貴女だけがそのように苦勞しなさる
?」

——猿猴、祥雲の上から姐己へお辞儀をしながら亦^また”日崩「ヒュウン」”と滑空。

猿猴とは勿論、孫悟空の事。

——回族も猿猴も去ったので、騒ぎは収まった。

落ち着いた馬超、

「姐己殿。貴方は回教徒の強行派を宥めるために、そのような格好で指導しなさっておる、と伺いますが——」

福祉団体であるオロチ軍は後進国の各国家の為に各地でカナート等の井戸を採掘して生活向上の為に貢献した。

「ええ、そうですとも。馬超さん。回教徒の繁栄の為ならば」

「それは大変ですねえ」

——姐己は軽装であるが華やかな衣裳を身に纏う。

（※中央アジアの地域の中では回教徒の女性でも服装が自由な場合もある）

衣裳は孫悟空が縫込んで仕立て上げたものである。

昔の姐己は木櫛も通さずに眼鏡をかける読書オタクの典型的な地味

な少女だった。

遠呂智は地味な姐己の為に高級な装飾品や衣裳を贈り、化粧を勧め、派手な性格に変えたのである。

卑弥呼の場合も同様である。

遠呂智は努力家の女性が美しく着飾る姿を見る事が好きなのである。

遠呂智軍の敵国であるモスクワ公国のツァーリも姐己には敬意を表して衣裳の贈り物をしていた。

個人的にイヴァン雷帝は孫悟空と姐己との共通の友人であるが、遠呂智軍は代々、チンギス家と確執を持つ。

「ねえ、馬超さん。イヴァン・ヴァシリエヴィチの事なんだけどさ、最近は何気ないってよ」

——イヴァン雷帝も織田信長と同様に拡大政策を取り、宗教勢力を抑えた。

織田信長が外交の目的に莫斯科^{モスクワ}

へ行向いて、皇帝イヴァン・ヴァシリエヴィチよりアレクサンドロフの離宮で引見を受けて木靴スケートで4回転ジャンプを披露した事があった。

（信長の子孫のスケート選手の人はロシアで修行した）

馬超、姐己へ口づけ。

「姐己殿、ウンコカレーの美味しい喫茶店があるから一緒に行くかね？今夜は？」

「ウンコカレー？大好物よ、気が合うわね。馬超さん」

——もし、姐己と一夜を過ごして懇意になる事ができるのであれば回教徒のスルタンを紹介して貰えるのではないかと馬超は期待した。

” 颯「ヒューッ」 ”

「ギャッ」

悲鳴を上げた姐己の豪華な衣裳へ鉄槍が投げ打たれる——衣裳はビリリと裂けて破け散る——鉄槍は姐己の心臓を^{うが}穿ち、^{えぐ}抉る。

「やったわね、韓遂！！」

体軀から血玉を噴いた姐己は力を振り絞りながら凶器の妖玉を” 日崩「シューッ」 ” と投げ放つ。

” 戛「ガンッ」 ”

妖玉は韓遂の脳天へ直撃。

「……騙されるなッ、馬超」

懐かしい声色が馬超の片耳へ届いた。

「逢いたかった…」

「馬超、目を覚ますのだッ。姐己は全く回教徒のいいなりであるッ」

——オロチ軍は表向きの顔は慈善団体であるがその実は、回族から油田の権利を高値で入札する利益団体である。

その他、訊くならくオロチ軍は珈琲やサトウキビ、綿花、金鉱等の土地を買い集めて大規模なプランテーションを経営している。

「ふん、邪魔が入った。じゃーな」

セミヌードの有り様であった姐己の姿は煙玉と爆竹で”ドロン”と消失。心臓を穿たれても妖魔^{うが}なので命に別状はない。

姐己の豊かなセミヌードを横目で見物する韓遂へ近付く馬超は懐かしい再会に胸を躍らせる。

「韓遂文約様……好きだ。愛している、愛している」

接吻をしようとして体軀へ絡み付いた馬超は韓遂より鉄槍で打ち据えられる。

”嘩「グシャッ」”

その次に韓遂の図体は血飛沫をピューッと噴き上げる——ドサリと大地の中へ崩れ落ちる。

懐刀に滲みた韓遂の血痕を衣服で拭い取る馬超に対して戦国軍の盟主、織田信長が初対面の挨拶をした。

「おおッ、馬超殿」

――以前は韓遂を全く無視していた織田信長は最近になって彼を招聘していたのだが彼は先刻、死亡してしまった。

翌日、陳珪の屋敷を織田信長が焼酎を手土産にして訪問して来た。

――数日後に織田信長は、新しく配下に加えた馬超をしたが従えて上洛した。

本能寺で宿泊した。

夜里の刻は、煌々と赤い焰の手が上がった。
城郭の木造の部分に葦が詰まっていた。

森蘭丸、「上様ッ。一大事です」

”ゴーツ”

本能寺の外郭はオロチ軍から包囲を受けている。
オロチ軍は暇つぶしに放火した焰で焼き芋を焼いて本能寺の惨状を悠々と眺めた。

董卓、「皆の者、オナラしてくだされ」

（プッププププー――）

メタンガス
沼気で蔓延したので劫火は益々、烈しくなった。その上、回族も乱入する。

オスマン・トルコ
土耳古から出航した油槽船は渡辺津（※摂津国の港）へ入港して、積荷の油は洛中の本能寺へ川船で輸送された。
回族たちはレパントの海戦で敗戦を喫していた。

ドカーン
”轟”

爆発音が鳴動する。地下庫には火薬が保管されていた。
本能寺の焰は更に広がって燎原の海と化した。

信長、「あー、携帯でゲームしている最中だったのにな」

滝川一益、「そんなことより消火しませんと」

信長、「スプリンクラーの設置はしてないのか？バケツリレーしかないな」

集めた桶を武将たちへ配る織田信長と滝川一益と、森兄弟。

（パシヤ、パシヤ）

——長槍を”日崩「シューツ」”と振回す馬超は首謀者の明智光秀を追いつく。

「馬超殿、加勢に参った」

紅蓮の焰原の中から趙雲が参上する。

” 嘩「グシャツ」 ”

森蘭丸の体軀は、趙雲の鉄槍で穿たれる——血飛沫を噴き出しながら業火の中へ崩れ陥ちる。

” 嘩「グシャツ」 ”

” 嘩「グシャツ」 ”

森蘭丸の弟らは次から次に趙雲の鉄槍で串刺しを受ける。

「趙雲殿。本願寺へ参ろう」

「何故？ 顕如殿は我らを良く思つたらん……まあ仕方あるまい」

謀叛者である明智光秀を一旦、見逃される事にする。

業火に包まれた桁梁が織田信長の佇立する床畳へ崩れ落ちる。

「信長公」

「覚悟は決めておるのじゃ。潔く参る」

その頃のモスクワ公国のイヴァン・ヴァシリエヴィチは心の病を患っている。大義の為に成した所業といえどもイヴァン4世の所業は許されざるものであるが、織田信長については世間は大局にみてくれた。

その違いは何故だろうか。同じ覇者であろうとも……。

（終）

小咄13（郭淮、夏侯淵） ※夏侯淵の死後の話です

※（元ネタはあだち充「タッチ」）

定軍山の戦いで夏侯淵が戦死した。

盛大な葬儀が行われた。

儒教を重んじる封建社会では葬式の日「泣き女」が呼ばれる。

台湾の場合、一部の地域でストリップパーが葬式に呼ばれる。

儒教は堅苦しいと呼ばれるが大らかで寛容な部分も持ち合わせる。

話題を”夏侯淵の死去”に戻す。

――夏侯淵の司馬であった郭淮は人前で涙を見せる事が出来ない。

一人、鉄橋へ向う。

土手の河川敷へ降りる。

線路の鉄橋の上を電車が通過する。

（ゴーツ）

（ガタン、ゴトン）

（ガタン、ゴトン）

（ガタン、ゴトン）

——郭淮は肩を震わせる。

夏侯霸が来る。「オイ、コラッ。郭淮。搜したぞ。何をしているか？」

（ヒッヒッヒ……）

郭淮は隠れて笑っていたのである。

（終）

小咄14（豊臣秀吉、黒田如水、石田三成） ※秀吉が石原慎太郎に？

昔の土曜の夜はテレビ番組『オレたち瓢箪族』が大流行。

リーダー格のヒデチャンマン（豊臣秀吉）は配下の『ヒデヨシ軍団』を酷使していた。

ヒデチャンマン（秀吉）に対して逆らうと”采配”で”戛戛”^{バンバン}と容赦なく打たれる。

ヒデチャンマン（秀吉）、
「おいッ。今回は”ひょうたんリフォーム劇場”にするぞッ。三成ッ」

石田三成、「ははっ」

ヒデチャンマン（秀吉）、
「大阪城をサントリーホールみたいな”ウンコ形”の城にリフォームしてくれ」

石田三成、「は？ウンコ形？」

ヒデチャンマン（秀吉）、
「”ウンコ形”の城廓が欲しいのじゃ。本丸の中に日本中から集めたウンコを溜めておけ」

石田三成、「つまり、大阪城を下水道処理施設としてリフォームするということわけですね？……そんな話より」

ヒデチャンマン（秀吉）、
「え？」

石田三成、 「国中の高札で発布した”ボーイズラブ禁止令”の事なんですが」

徳川家康、 「”ボーイズラブ禁止令”の影響で一揆が各地で起きています」

ヒデチャンマン（秀吉）、
「ワシは”ボーイズラブ禁止令”は止めないぞ」

黒田如水、 「太閤様……」

ヒデチャンマン（秀吉）、
「如水ッ。貴様はBL同人誌を着物の中に隠しているな」

黒田如水、 「ひくくお許してください」

ヒデチャンマン（秀吉）、
「大分県へ左遷じゃ」

涙を流す黒田如水、 「（ゲェッ。あんなド田舎……）有難うございます。」

豊臣秀吉の発布した”ボーイズラブ禁止令”の影響で全国の腐女子は処刑された。

徳川家康、「ワシが何とかしてやろう」

（終）

小咄15（郭淮、張コウ、司馬懿、張春華） ※瓢箪を使って…

秀吉のみならず南中のラオス地域でも瓢箪の伝説がある。

郭淮、「張將軍様。大きな瓢箪を入手しました」

南中の瓢箪は漢中に渡った後で曹魏が没収した逸品である。

張コウ、「南中の瓢箪？何の役に立つんだ」

郭淮、「この瓢箪の穴を私に向けて名前を逆さに呼んで下さい」

張コウ、「わかった……」淮郭」

郭淮、「はいッ」

何処からか”颯「サーッ」”と突風が吹いてきて郭淮の着ていた衣裳を全て吹き飛ばす。

吹き飛ばされた郭淮の衣裳は瓢箪の中に吸い込まれる。

全裸の姿にされた郭淮、

「ほら……」

張コウ、「”瓢箪が名前を逆さに呼んで返事をする”と衣裳を吸い込む”だと？」

自分で勝手に衣裳を脱いだのではないのか？」

曹洪、「その瓢箪を俺にくれ〜」

郭淮、「私には必要ありません。あげますよ」

司馬懿、「呪術に熱中してはならん。瓢箪はワシが没収する」

没収した瓢箪を持って自分の屋敷に戻った司馬懿。

張春華、「……」

瓢箪を開けた司馬懿、

”華春張”

突風が吹いてきて奥方の張春華の衣裳を吹き飛ばし、全裸にする予定であるが——生憎、張春華は今日是不機嫌であるので返事をし
て貰えなかった。

瓢箪の効果を出す為には”返事”を貰わなくてはならないのである。

（終）

（※OROCHI設定）インパール（南中）の戦い1（曹操、卑弥呼）

※連合

天空に10個の太陽が昇る。

須らく黒点の増大した二つの金輪を射落とすべし。

オロチ軍が華北と呉を制圧して大陸打通作戦を始めた頃に、オロチ軍と内通した孫策と南中の雍骸は連合軍に対して反旗を翻した。

長兄の劉循と離れて父親と共に公安に移住した劉闡は関羽が敗走した時にオロチ軍へ投降した。

オロチ軍の孫策は劉闡を益州刺史として擁立した。

オロチ軍と通じて反乱を起こした南中の雍骸に対して数少ない賛同者である孟獲と高定が馳せ参じる。

交趾（北ベトナム）太守の士燮は孟獲へ連絡を取って援助を行った。

南中の土民を各地の山寺の境内に集めて演説を行った孟獲は、オロチ軍の側に付くよう説得して義勇軍を動員した。

今回の孟獲が反乱を起こした地域は、ビルマ国境側の永昌郡（雲南省チンポー族自治州保山市）。

連合軍の王伉が構える蜀漢の永昌城はオロチ軍の孟獲より占拠を受けた。

連合軍の幹部、袁紹の空軍は連永昌城へ向けて空爆や投降を勧める紙弾撒き作業を続けていた。紙弾（宣伝ビラ）の内容は陳琳がしたためた。

オロチ軍の総大将、木曾義仲は永昌城の孟獲を救出する為に天竺行きの強行軍を動員した。

益州永昌郡（雲南省保山市）から西進すると天竺に辿り着く。

永昌郡の部族の一つ、哀牢夷は風習で体に刺青を彫る。

険峻とした山塊が聳え立つ天竺との境の地域は過去に烏戈国（北ビルマのチワン族）と呼ばれていた。

オロチ軍は緬甸^{ビルマ}の地に傀儡として木鹿大王を擁立した。

”轟「ドカーン」”

”轟「ゴーツ」”

連合軍の戦略攻撃で各地の南中の燎原はB－29の焼夷弾で火の海に変わった。

マダラチュウヒは粉灰に変じた肉塊をを採食する。

地獄の如き様相である。

”丁丁「ポロン、ポロン」”

稜線を下る麓の密林の中では、豎琴を奏でる壮麗な音色が鳴り渡る。旋律は兵卒たちの魂魄を癒す。

肉塊から遊離した魂魄は次々に昇天して行く。

”丁丁「ポロン、ポロン」”

下界に生きる奏者は豎琴を奏でながら見覚えのある懐かしい光景を眺望する。

星宿^{ほし}の光は消失——野砲が放つ照明弾が浮遊する。

豎琴の奏者の秀麗な形相が垣間見える。

南中の僧侶たちは女子に対して必要以上に嫌悪を示す。

更に山麓を下ると豊かな原生林と椰子^{ヤシ}が稔実する。

連合軍はインパール盆地に前線の基地を建設した。

対峙するオロチ軍はコヒマから南方のインパール基地に対して連日、襲撃を続けた。

インパール基地の仮設捕虜収容所では捕虜の身分である孫悟空と卑弥呼が「教育」を受けた。

連合軍よりコヒマで拿捕を受けて捕虜にされた恋人の卑弥呼を救出する為に孫悟空も投降した。

「教育」の時間が過ぎると普請作業を天陽が没する刻まで続けた。

収容所では、連合軍の盟主である曹操に対して忠誠を誓約せねばならない。

地鳴きをする鵜^{ツグミ}が飛び交う。

曹操、「判りましたか？ 今後は心地を入れ替えて下さい」

収容所の連合軍の「教育」について芳しくない評判を聞き及んでいるが曹魏の教育は普通と違っている。

連合軍側の理不尽な「教育」について孫悟空は曹操に対して詰問し

た。

曹操、「貴方がたは信頼できません」

卑弥呼、「ウチ、曹操はんのこと愛してるっちゃ。安心してっちゃ」

曹操、「卑弥呼さん。先日の変人タインは贈り物を頂きましてどうも有難うございました」

バレンタインの季節のみならずオロチ軍の卑弥呼は、魏軍の曹操に対して手作りの菓子や手織の衣裳を贈り続けていた。

心苦しい曹操は返礼の品々について卑弥呼に尋ねると”鏡が要る”と要求された。

曹操、「そんなに沢山の鏡を何の目的にお使いなさるのですか」

卑弥呼、「省エネの為だっちゃ。資源がないっちゃ」

曹操、「莫大な資源があろうとも不幸な国家は沢山あります」

オロチ軍の塹壕に対する砲撃を終了したM3中戦車が土煙を散じながら帰陣する。オロチ軍より砲弾を受けて破壊されたはずの中戦車は工廠で修理を受けた後で数日後に復帰できる。

輸送車のM3ハーフトラックが大量の物資を載せて出発した。

碧色の上空では空挺部隊のグライダーが滑空する。

三蔵法師は、天竺旅行の帰りの最中だった。

「わー、孫悟空、みーつけた」

びようびよう
眇眇たる翠天、三蔵法師がグライダーに搭乗して飛翔する様は恰も
禽鳥の如し、收容所の営庭^{グラウンド}へ向けて勢いよく降下した。

「悟空、愛してる、わたしを受け止めてー！！」

グライダーから手を放し、微笑んで両手を広げた三蔵法師。

地上から孫悟空も両手を広げて待ち構えた。

グライダーは森林の中へ翠葉を散じて不時着。

間一髪、孫悟空は”日崩「ヒューッ」”と縦身（身を翻して跳躍）^{グラウンド}。

三蔵法師は両手を広げたまま收容所の営庭の地面へ全身を打擲した。

卑弥呼、「三蔵はん、また孫ちゃん追ってきたんか、おおきにな」

地面から這い上がる三蔵法師は土埃だらけの格好である。

嘆息した卑弥呼、「孫ちゃんは木曾殿と一緒に、本陣の司令部で料亭と芸者を呼んで遊んでおったわ」

オロチ軍の補給は全くままならずという状況であった。

——曹操は張遼に対して目線で合図をした。

軍議を開いた連合軍は、孫悟空と木曾義高との2名の処分について銃殺刑の実行を決議した。

木曾義高はオロチ軍の木曾義仲の長子であるが先に連合軍へ投降した。

翌日、後手を縛られて目隠しをされた孫悟空と木曾義高は収容所の鉄壁の手前に並んで起立する。

「木曾殿。許せ、貴殿に恨みはない。誠に遺憾であるが御覚悟なされ」

”轟「パン」”

顔面に白布が敷かれた秀麗な亡骸ぼうがいは担架で運び去られた。次に銃口は孫悟空の額の先へ向けられた。

涙を流しながら命乞いを始めた孫悟空、

「曹操様。俺の命を助けて下さるならば木曾殿の居場所へ案内を致しましょう」

——交戦相手であるオロチ軍の助っ人、木曾義仲は今回のインパール作戦に総大将として参戦していた。

曹操、「木曾殿か。致し方がない」

処刑を免れた孫悟空は曹操に対して感謝の涙を流しながら五体投地の礼をした。

連合軍はオロチ軍の木曾義仲を手配していた。

南中から蜀道へ続く連合軍の糧道は守備を担当した袁紹の部隊が敗走したのでオロチ軍の孟獲から占拠を受けた。

曹操を総大将とする連合軍は反撃に打って出たので戦況はすぐに逆転した。

連合軍はグライダー等の輸送機を使用して天竺から大量に物資の空輸を行った。

” 丁丁 「ポロンポロン」 ”

” 丁丁 「ポロンポロン」 ”

張遼、 「あの豎琴の音色は？ まあいいや。 孫悟空殿も卑弥呼様も今宵は我々と酒盛りいたしましょう。 蓄音機もありますのでカラオケもどうぞ」

卑弥呼、 「ウチは自宅にDVDカラオケセットを持っているっちゃよ」

張遼、 「おお、 すごいですねー。 俺の家は月賦で買った蓄音機しかないのですわ」

酒盛りが開れたインパール基地内では豪華な酒肴が次々に振る舞われる。

蓄音機の音楽が流れる。

卑弥呼は食事に手を付けていない。

戦地に残された同朋たちは苦しみ喘いでいる。

張遼が無理やり食べさせようとしても拒絶される。

不機嫌になった張遼に対して孫悟空は怒りを抑えながら必死に宥める。

「卑弥呼様。暗い顔は止めにして……ここで一つ、貴女の好きな
月月火水木金金”の曲を皆様と一緒に歌いましょう」

”月月火水木金金”のレコードが蓄音機で回転する。

孫悟空と卑弥呼は高音部と低音部に別れてデュエット。

張遼と三蔵法師は手を叩いてパンパンと両手で拍子を取る。

荘厳な音楽を奏でる蓄音機の回転は、駆けつけた曹操の手で止められる。

代わりに曹操は「南の国のカメハメハ」のレコードを蓄音機で回す。

平清盛は倭国の大本営から木曾義仲へ電信で逐次、指示を与えた。

重慶（巴郡）が終点である糧道は連合軍の袁紹の名前から「袁紹ルート」という綽名を持った。

連合軍が袁紹ルートを奪取する事は赤子の手を捻るが如し実に容易であった。

悠長に、緩慢に、遅鈍に――その都度、彼らを袋小路へと追いかみ――力量の程度を知らしめなくてはならなかった。

明日の連合軍の作戦の目的は、「オロチ軍総大将の木曾義仲の捕獲」。

その作戦を担当する武将として、孫悟空、卑弥呼、三蔵法師の3人が任命された。

緬甸^{ビルマ}の首都の東側、メイミョーにオロチ軍の本陣が置かれた。

野戦病院、兵站基地、工廠、酒保が置かれた。

各地に聳え建っていた金色の仏塔^{パゴダ}はオロチ軍の松永久秀から陣地として使用され、その後で爆破された。

金色の花梨^{パドウク}の咲く路道を輸送トラックが走行して死地と往復した。

「義仲さまあ、うっふん」 芸者の葵、義仲の体軀に絡みついた。

「義仲さま、こっちも」 もう一人の芸者である山吹も負けずに義仲の酒杯へ酌をした。

オロチ軍の司令官である木曾義仲の淫逸な宴会は連合軍の仕掛けた集音マイクで盗聴された。

連合軍はその嬌声の中継をスピーカーを使用して各地の前線で放送した。

（うふん、義仲さま）

（あはん、義仲さま）

「ふざけんなよ、木曾殿!!」

永昌城の楼上で死闘中のオロチ軍の孟獲は憤った。

連合軍のP-40が上空で孟獲の放つ高射砲を受けて炎上、黒煙を
発して墜落。

祝融はロケット砲（火箭）で連合軍の戦車部隊と戦った。

祝融、「アンタ、そろそろ砲弾がなくなっちゃうよ」

オロチ軍の士気はどんどん落ちていった。

（インパールの戦い 第2話へ続く）

※後書きはインパール（南中）の戦い 参戦武将一覧と解説

※史実の玄奘三蔵は天竺帰りに近道である南中を通して唐へ帰る予定だったそうです。

※コーエーの三国志シリーズで最後に負けるとき（Game Over）は蜀の南中（永昌）あたりで終わってしまう場合があるけど、ビルマ戦線みたいですな。

（※OROCHI設定）インパール（南中）の戦い2（張コウ、夏侯淵） ※オ

南中の扶南国では各地でゲリラ用の地下壕が築かれたので、激甚な戦闘が続いた。

密林の負傷して戦闘を離脱した魏軍の張コウ（「合β」）は河間へ帰宅した。

酒場に集う若者たちはギターの伴奏で唱歌をする。

互いに肩を組み合いながら平和と青春の賛美をする。

帰還兵の張コウを待ち受けたものは反戦運動の刹那的な嗜好に流された無責任な若者の集団であった。

「アハハ、張コウの頭の脳味噌はチョウコウツト」

「ベトナム人の生命を返せーッ」

「張「合β」の人殺しめッ」

「もっと給料を上げろーッ」

「雇用を増やせーッ」

「パンをよこせッ」

「バナナとリンゴを出せッ」

「表現規制はヤメローッ」

「原発を停止しろッ」

「うるさいッ馬鹿者ッ」

格子窓から首元を突き出しながら、怒鳴り散らす張コウの姿形を見た若者たちは遁走した。

補給用として援助する兵站は河港や鉄道の駅へ向けて、驢馬やトラックが荷台に載せながら街道を輸送する。

花大根は紫紺色の芳花を咲かせた。

PTSDを患う張コウの屋敷を盟友の夏侯淵が伺候した。

病房で横臥をする張コウの眼精に宿る焰は衰えを呈していた。

「張コウ、早く元気を出せ」

夏侯淵は煎じて薬湯を与えた。

「PTSDなんて気にするな。我らの盟主である曹操様はマスコミの週刊誌から愛人問題で毎日、バッシングを受けているのだ。我だって覇から見限られたので辛いのは貴殿だけではないのだ」

張コウは過去の思い出を語り始めた。

「妙才。終戦前の頃は……」

終戦前、連合軍の招聘を受けた夏侯淵と張コウは天竺の新德里^{ニューデリー}へ着任をした。

魏軍を筆頭に各地の連合軍が続々と天竺へ集結する。

役所を管理する色目人たちは広大な幅員の道路や鉄道の敷設をして天竺の地へ再びインフラを与えて治安を上昇させていた。

天竺が色目人から支配を受けた話は漢代でも聞かれた。

『天竺の解放』をスローガンに掲げるオロチ軍と倭国に対して、連合軍とブリタニア・ケルト人は結託した。

ブリタニア・ケルト人の巷間では天竺で仏教が再興したので、無数の民間人を殺戮したケルト人のみならず夏侯淵と張コウも救済を求めていた。

天竺の道徳は人間の生贄を犠牲にして祭礼を行うケルト人のみならず、魏国の歓迎を受けた。

厚い氷で覆われる険峻とした大雪山は月まで届く程に高い。

天竺から離陸をした夏侯淵と張コウの搭乗する輸送機は、戦車を懸垂しながら、空輸を行う。

太空から眺望する雲波は茫漠であること^{あたら}も桃源郷の如きである。
ビルマ（緬甸）国境に建つインパール基地へ至った夏侯淵と張コウは曹操へ復命した。

激戦地のインパールを完守した後は北進をしてミイトキーナを攻略する。次は東進すると我が国へ至る。

遠呂智軍の要所である旧蜀漢の永昌城を攻略すると、作戦を終結する予定である。

地表に近く瞬く星斗に映照された原生林の中で、夏侯淵と共に偵察車で陣回りをしながら、昼間の銃撃戦の遺体の収容を行った。

発見した遺体の天竺人の山岳兵は子供であるが肉体は強靱である。

貧困を理由に志願する少年兵は後を絶たず、”斯^かくの如き無意味な戦争は早急に終結すべし”と張コウは考える。

オロチ軍の兵卒は信仰の為に恐怖を知らず我が軍を怯えさせたが、敵前逃亡は軍律では営倉へ留置されるか、若^もしくは銃殺刑に処される。

ポロギロン
”丁丁”

豎琴を奏じる旋律が闇夜の中に響き渡る。

偵察車の中から降車した張コウは、投降兵の平経正が岩塊の上に佇みながら、豎琴を奏でる姿を発見する。

各地の前線で兵卒を激励する仕事が現在の平経正の任務である。

山吹色の僧衣を纏う平経正の形相を淡い月輪が映じた。

張コウの姿形に気付いた平経正は微笑みながら、片手を挙げて会釈をした後に、亦た演奏を続けた。

”ポロポロン 丁丁”

南方の旋律に似ている。

白い月は雲霞の中へ静かに隠れ始めた。

”ポロン 丁丁”

別の方角からも豎琴の旋律が鳴り渡る。

”ポロン 丁丁”

同じく南方に似た旋律の二重奏である。

”ポロン 丁丁”

豎琴の音色は、酒井法子の「一億のスマイル」の旋律に変わる。

懐かしのアイドルの酒井法子は中国でも絶大な人気を持つ。

覚醒剤と言えはビルマの三角地帯の中でアヘンの栽培が行われる様子である。

（ザアーツ）

気配を察した別の豎琴の奏者は高く跳躍をする———冥夜の原生林の中へ姿形を隠す。

（ザザーッ）

昏黒の原生林の中を遽走^{そそはし}る奏者の月陰を、張コウが追逐^{ついちく}する。

灰色の雲から白い月が再び顔を出す。

もう一人の豎琴を奏でていた青年はオロチ軍の周瑜である様子である。

孫策と共にオロチ軍へ寝返った周瑜は姐己を愛したという噂話がある。

つまり大喬も小喬も姉妹揃って捨てられたわけである。
檳榔^{ビンロウ}という神経作用を持つ植物はビルマ（緬甸）では夫婦を象徴する。

（平経正殿は敵味方も区別なく供養をしなさる）
（是れ見よがしに伝統好きを装う輩を我々は好まぬ）

遠方で豎琴を片手に佇む周瑜の陰翳が動作しはじめる。

”轟” 「ダダダッ」

”轟” 「ダダダ……」

携行する三八式歩兵銃を構えながら待機していた周瑜は張コウへ狙いを定める——掃射を始める。

”轟 「ダダダッ……」

張コウの肩や足へ鉛弾が”日崩 「ヒューッ」”と涼過、命中——鮮血が噴き出す。

張コウの眉間へ向けて掃射——横へ跳び退く張コウ——自動拳

銃を懷中から取り出す——”轟”——周瑜は豎琴を取出す——
”^{ポロン}丁丁”——豎琴の曲身の尖端は張コウの片手の甲を激しく痛打
——把持していた自動拳銃は足元の草叢の中へ落下——。
首元を掴まれた張コウの眼前へ銃口が突き付けられる。

「周瑜。いい加減に投降するのだ。オロチ軍の敗戦は決定的である」
陳琳が作成した紙弾（宣伝ビラ）を懷中から取り出して周瑜の目前で広げる。

”轟”「ダダダ……」
宣伝ビラの中央は周瑜の歩兵銃が掃射する鉛弾が涼過——丸い節穴を押し開く——間一髪、片足の甲を使った血塗れの張コウは自動拳銃を草藪から蹴り上げる——片腕で周瑜の首元を捻じ伏せる——眉間へ銃口を押し当てる。

振り払った後で逃亡した周瑜の背後へ向けて張コウが拳銃を”構える——”轟”——外れたパラベラム弾は草藪に潜む猛虎を射殺した。

逃亡する周瑜を夏侯淵が取り押さえる。張コウが袈裟を剥ぎ取る。

「妙才。これは正に狂気である」

深夜、張コウと夏侯淵の二人から周瑜が襲撃を受ける場面を偶然、目撃をした民間人たちは大騒ぎをした。

（袈裟を奪う妖怪が現れた）
（袈裟を奪う妖怪が現れた）

ついでながら、先程の陳琳が草案した宣伝ビラの内容は。

【連合軍の盟主である曹操様がスターリンやヒトラーの手先であるという評判は全くの捏造である】

【連合軍の盟主である曹操様が猷帝を殺害したという評判は全くの事実無根である】

【連合軍の盟主である曹操様に愛人がいるという評判は全くの事実無根である】

【連合軍の盟主の曹操様が”スプーン曲げが出来る”と吹聴したという評判は全く事実無根である】

【連合軍の盟主の曹操様の正体が実は”スプーンおばさん”であるという評判は全く事実無根である】

畢竟、奪った金色の袈裟で張「合β」は夏侯淵と結託して何をする所存でいるのか？

（インパールの戦い第3話へ 続く）

（※OROCHI設定）インパール（南中）の戦い3（三蔵法師（♀）、張コウ

「父さんは若い頃……その時に不覚にも魏軍の張「合^{コウ}β」殿から袈裟を奪われた…」

「父上、またあの話ですか。それより雪合戦をして遊びたいんです」
終戦後に母国へ帰国した後に一家揃ってカナダへ移住をした周瑜は息子の周循と周胤に対して過去の思い出を語った。
一時期の間に加担していたオロチ軍は遠い過去の思い出である。

甘やかしを受けて育った息子たちの態度は大学で教鞭を取る父親の周瑜の手を煩わせた。

息子たちにとって周瑜の理想は程遠いものであった。

蜀漢の南端に位置する永昌郡から出^いでる怒江は緬^{ビルマ}甸の孟邦（モン州）へ流れ出た後に大海へ至る。

緬^{ビルマ}甸と泰^{タイ}国との国境である北碧府（タイ国西部…カンチャナブリー県）では桂河（クウエー河）が流れる。

オロチ軍の兵站鉄道は泰^{タイ}国の北碧府（カンチャナブリー県）から出^いでてビルマ国境に至る。
ビルマ国境から次に緬^{ビルマ}甸の孟邦（モン州）ムドンを通過すると首都のマンダレーへ至る。

オロチ軍は北碧府の密林の中で普請作業を突貫で進めている。

” 「抗育「エンヤゝコラ」」

” 答答「カンカン」

” 嘩拉「ガラガラ」

捕虜収容所では連合軍から投降した捕虜たちが収容される。

彼ら捕虜たちはオロチ軍の鉄橋の建設工事の作業の為に重労働を耐え忍ぶ毎日である。

徐晃、 「疲れたゝゝ」

織田信長、 「死にそゝゝ」

大友宗麟、 「ひでゝゝ」

連合軍からオロチ軍へ寝返った孫策は捕虜収容所の所長の任に就いている。

「キリキリ歩けい！！！！」

鉄鞭を振回すオロチ軍の呂範は収容所の捕虜たちの作業を管理する。

所長の孫策、

「呂範。橋梁の工事の様子は？」

孫策と周瑜のみならず呂範と全ソウもオロチ軍へ寝返っている。

(ひえ)。今日の孫策様は不機嫌だなあ)

「所長。捕虜たちに対して休養を与える方が良いと思われます」

「馬鹿者ッ」

激昂した所長の孫策は呂範の前を素通り——凌統の顔面へ拳骨で” 夏「ガンッ」” と殴打を加える。

体軀をグラリと傾倒させた凌統を見て” ゲラゲラ” と甘寧は嘲弄する。

その甘寧の下腹へ孫策が片脚で” 夏「ガンッ」” と殴打。

「予定通り速やかに工事を進めなくては前線へ兵站を届ける事が出来ないので堪忍せよ」

収容所の指令室を訪れた捕虜の司馬懿。

「あの、所長さん。国際法について相談があります」

「何事だッ。司馬懿殿。忙しいから用件は早めに済ませて戴きますぞ」

「新国際法 捕虜の待遇案について (提案…司馬懿)」

其の1. オロチ軍は捕虜に対し、完全週休二日制の制度を施行すべし
其の2. 捕虜の作業時間は9時から休憩を挟み、12時から14時まで昼食、その後も休憩を挟み、午後5時までとする。

其の3. 捕虜の食事は一日2000kcalの基準を下回らない事とする。任意に利用できる食堂（すかいらく、マクドナルド等）を設置すべし。

其の4. 捕虜の宿舎は一人一室、テレビと電話、インターネット、プレステ、バスルーム、電子レンジ、洗濯機、冷蔵庫、冷暖房と駐車場の設備を完備すべし

其の5. 捕虜たちにも慰安所を設置すべし。慰安所はカラオケの設備を要す。慰安旅行はタヒチにすべし

其の6. 戦後の賠償金は一人につき1億円を支払って欲しい

「司馬さん。馬鹿を云ってくださいますな。寝言を謂いなさる」

所長の孫策は、捕虜の技官である司馬懿の提案に対して激昂する。

「皆の者、報告がある。一列に並べッ」

作業を中止した捕虜の兵卒たちが収容所の営庭へ集合する。

点呼が始った。

” 夏「バシッ」
” 夏「バシッ」
”

生半可な返事を返すと孫策から猛烈なビンタを喰らわされる。

「皆の者、最近、”袈裟を奪う妖怪”が各地で出没しておる。我々オロチ軍は現地の民間人と相互協力をしながら橋梁の作業を進めておるが……」

現地の僧侶と結託したオロチ軍の兵卒は袈裟を身に付けて民間の僧侶に成り済ます。

変装すると連合軍の追跡を避ける事が出来る。

最近、”袈裟を奪う妖怪”が各地で出現し始めたので油断は禁物である。

「”袈裟を奪う妖怪”は連合軍の手先かもしれん。何か情報があったら速やかに呂範に連絡する事。よいかッ」

原生林の飄渺とした大気は漂う死臭で暗く淀んでいる。

滔滔と流れる桂河（クウエー河）に揺蕩う屍塊は無念の意識を残す。

——その頃、緬甸^{ビルマ}では。

捕虜として収容所へ連行を受けたオロチ軍の幹部の孫悟空と卑弥呼の二人は、連合軍の盟主である曹操から任命を受けている。

オロチ軍の総大将である木曾義仲に対して連合軍に対する投降を勧めるよう説得する任務である。

孫悟空と卑弥呼の監視役は三蔵法師。三蔵法師は天竺旅行の帰り道である。

奇崛^{きくつ}、巍峨^{いがか}とした山塊を越えた。

木曾義仲の構えるオロチ軍の本陣を目指しながら原生林の中を進む。連合軍から空爆を受けたので本陣は幾度も場所を転々としている。

ルーンジ（筒型の服）に身を包む現地の民間人たちは連合軍の軍服を見ると眉を顰^{ひそ}めながら狼狽しながら立ち去って行く。

オロチ軍と結託した民間人に対して宿を請う事が出来ないので野宿を行う事にする。
孫悟空と卑弥呼は同じ場所で休み、三蔵法師は離れた場所で休む日々が続く。

大量の肉蠅が飛び交う。
充満する死臭は日増しに強く、濃くなっている。

同胞の屍塊の続く”死の回廊”に立つ卑弥呼に対して孫悟空と三蔵法師は大事に至らぬよう様子を見ている。

「悟空、お腹すいたわ。どっかの民家から斎（布施の食事）を貰って来てよ」

孫悟空に対して腕を渡す三蔵法師。

「卑弥呼殿。民家の連中はオロチ軍と結託しておりますので我が連合軍に対して協力しませんが、連合軍にはパラシュートで食料が補給されて来る筈ですので、我も腹減ったから取りに行ってください」

卑弥呼へ約束して祥雲へ飛び乗った孫悟空は、連合軍の輸送機がパラシュート投下した食料の包みを発見して戻って来た。

連合軍へ投降する以前の孫悟空は幾度も食料の包みを盗み取り、同胞へ与えていた。

「ウチは要らん。二人で食っというてや」

卑弥呼に対して拳骨を振り上げた孫悟空、

「いい加減にするのだな」

森然とした原生林の彼方から現地の僧侶が卑弥呼の一行へ接近して来た。

金色の袈裟を身に纏う僧侶は食物の入った銅の壺を小脇に抱えている。

「旅のお方。お布施を差し上げましょう」

僧侶の正体は連合軍の張コウである。

夏侯淵と共同で現地の僧院を見廻る任を連合軍より受けている。

僧院に潜伏していたオロチ軍の兵卒を発見すると袈裟を没収した。

正体を看破した孫悟空、

「貴様はオロチ軍の手先のニセ僧侶か？」

捕虜として投降した孫悟空は今では連合軍の為に任を受けている。連合軍の張コウは民間の僧侶の格好を装っているの。”オロチ軍の仲間である”と孫悟空から誤解を受けた様子である。

「誤解です。我は連合軍の者です」

「誤魔化しなさんな」

”日崩「ヒュン」日崩「ヒュン」”

金箍棒を振回す——張コウの図体へ”廳「シューツ」”と振下す——後方へ”廳「シューツ」”跳び退いた張コウは次の手を鉄鉤で抑止——孫悟空の身体ごと前方へ押し戻す。

上方へ跳び上がる張コウの片足の下を金箍棒が涼過——諸手の鉄鉤を組交わす——上方から孫悟空の脳天へ斜めに”廳「サーツ」”と振下す——跳び退いた孫悟空は閃避——崩した体勢へ向けて諸手の鉄鉤が”廳「サーツ」”と打ち迫る——孫悟空、体軀を薙ぎ倒される。

——血飛沫に塗れた孫悟空の眼前へ亦た張コウの鉄鉤が”廳「サーツ」”と打ち迫る——抑止する金箍棒と鏢迫り合い——。

”ピ。ピ。ピ。”

夏候淵からのCメールである。

” 颯「シューッ」 ”

油断をした張コウの体軀へ金箍棒が打ち当てられた。

” ピューッ ” と血飛沫を上げた張コウの図体は大地に崩れ落ちた。

金箍棒の先端を使って、屍が纏^{まと}う袈裟を引っ掛けて剥ぎ取る。

袈裟は草藪の中へポンと放り捨てられた。

白い肌が露わにされた張コウの心拍の停止を金箍棒で突いて確認をする。

涙を流す三蔵法師、

「悟空、罪のない人に対して何て事をするの？」

「ワレ。いい加減にせんか。清盛様が” 民間人には手え出したらアカン ” と云うとりますやろ」

（何という剣幕！！）

「ひどい。では、おれはオロチ軍に戻りますよ」

激怒した孫悟空は祥雲を呼び、卑弥呼を無理やり乗せて一緒に彼方

まで” 颯「ヒューツ」

”と滑空、消えてしまった。

「助かった」

ケチャップで死んだふりをした張コウは一切の気配を止めていた。

「是このような格好で失敬……」

起き上がって剥がされた袈裟を纏まとった張コウは携帯が受信した夏侯淵からのCメールの確認をする。

【張シュンガイ（^o^）／、今夜の夕飯は激辛カレーライスでいいかな】

張コウと夏侯淵はGPSの位置情報を互いに確認できる間柄である。一方、三蔵法師の場合、孫悟空の携帯電話の番号もメールアドレスも全く知らされていなかった。

「郭淮さんは放つといていいの？ 妬いたりしない？」

「んん、何でしたら」

張コウは孫悟空の漫画のブログURLを知っているが、関心がないので一度も読んだ事がない。

「孫悟空のブログURLを教えて。張「合β」さん。でもどうして袈裟を着ているの？」

三蔵法師と張コウは、一緒にオロチ軍の総大将、木曾義仲の本陣を探す事にした。

「ジャブジャブ」

瀟瀟とした激しい雨風の中、氾濫した土壌の中を進む。

翠碧の密林の中は藹藹あいあいと満ちている。

関関「カンカン」と禽鳥しゅんしゅんが鳴き騒ぐ。

ヒルは蠢蠢しゅんしゅんと素肌に纏い付く。

密林の中は星月夜。

三蔵法師は寝袋の中に入る。

「張コウさんも見張りばかりしてないで眠るといいのよ……アッ」

突如——張コウの身体は三蔵法師の身体の上に”ドサリ”と覆い被さる。

”轟「ダダッ……」”

”轟「ダダッ……」”

三蔵法師の身体しんたいの盾になる張コウの身体に三八式歩兵銃の鉛玉が擦

る――。

「張コウ、喰らえッ!!!」

オロチ軍の幹部の周瑜は張コウの行き先を追跡していた。

「張〔合β〕、ワシの袈裟を返さんのなら殺してやる!!!」

”ピピピ”

夏侯淵からCメール。

【ハイ、張シュン。○(ハハハ)○今夜のメニューの激辛カレーライスは予定を変更してウンコカレーにするので悪しからず(TOT)(＜|＞)】

張コウ、「ヒエッ」

周瑜の眼前を銃弾が”日崩〔ヒュウン〕”と涼過した。

”格格格格格格〔ダダダダ〕”

たちまち周辺は大火事。

熊熊〔ゴーゴー〕

連合軍の戦闘機が機銃掃射し始めた。

蔡蔡、条条と茂る密林は焼光、平らになった。

後程、袈裟は返却して貰えた。敗戦を迎えたオロチ軍は緬甸ビルマの東南、孟邦（モン州）ムドンの収容所で暮らし、作業をする生活を過ごして帰国の指示を待った。

連合軍から戦犯容疑で手配を受けて収容所から逃亡した周瑜は、現地の僧院へ潜伏した。

僧侶に変装した周瑜は托鉢、座禅、講義、村落を行進する等、修行に勤しむ。だが、僧院の時代錯誤の戒律は、現代人の周瑜を辟易させた。

いよいよオロチ（呉軍）の帰国が決定、緬甸ビルマの収容所を去る日が訪れた。

オロチ軍（呉軍）の仲間と呉軍の仲間たちが周瑜の潜伏する僧院へ面会をしに来た。

昔の呉の武将たち、山越の人々である。

金黄色の袈裟を来た周瑜は喜んで、僧院の柵を挟んで彼らを出迎えた。

仲間たちは、周瑜の恩赦が決定した事を報告した。

丁丁「ポロンポロン」

周瑜は大粒の涙を流し、豎琴を奏で、感激を伝える。

「皆さん、よくぞ来てくださいました…。私も一緒に帰ります」

丁丁「ポロンポロン」

荷物の準備をした周瑜、世話になった僧院の僧侶たちへ挨拶。

周瑜、「では、参ろう」

諸葛瑾、「周瑜殿、帰って来なくていいですよ」

周瑜、「え？」

呉軍は山越人たちと相談して周瑜を僧院に残す事にした。

残忍な周瑜の性格であるなら、緬甸ビルマの地に置いたままにしたほうが彼の為なのである。

虞翻、「是非とも、ここに居残って立派な僧侶として暮らして下さい、周瑜殿」

周瑜、「え？馬鹿な…」

少喬、「私、新しい夫と再婚したの……なんて冗談よ」

悪質な冗談である。

周瑜が息子たちへ語る、オロチ時代の思い出話はそこで終わった。
息子たちは母親の少喬と共に、雪景色の外へ櫓遊び^{そり}に出かけた。

（インパールの戦い 第4話に続く）

※後書きはインパール（南中）の戦い 参戦武将一覧と解説

（※OROCHI設定）インパール（南中）の戦い4（トウ艾、孫策）

別動隊として魏軍の郭淮は「登β」艾と共に、逃亡するオロチ軍の本曾義仲の一向の行方を追跡していた。

南中から西進してヒマラヤ山脈を越え、ヒンズークシュ山脈を越え、ウラル山脈を越え、北極島、アラスカ、シベリア大地を越えて――
――大興安嶺山脈まで至った。

「ウー、祖国の辺りまで一周して戻って来てしまったわい」

オロチヨン小屋で一休みをした「登β」艾は手書きの地図トウガイを眺めながら自作ラジオで相撲中継の放送を聴いている。

郭淮は「登β」艾がランタンで沸かしたコーヒーを飲んで暖を取る。

「「登β」艾殿。明日、呂布の屋敷を見に参りませんか？すごく豪華ですってよ」

――市街地に建つ連合軍の呂布の邸宅は白ペンキ塗りの壁にダイヤモンドが嵌め込まれ、庭石にもダイヤモンドが使用された広い豪華な木造住宅である。

所有する広大な牧場では馬や牛が養われる。

「ウー郭淮殿。我は興味ありませんね。貴殿が王允殿の縁戚ですからってね」

開口部から映じる針葉樹林は銀白色に覆われている。
郭淮は太原の出身である。

「郭淮殿、何故に呂布があれ程までに金持ちになったとは？常に貧しき者の味方の立場を吹聴し続けた彼が？」

「如何にも。」「登β」「艾殿」

連合軍の袁紹は人気取りの為に常に呂布の行動を弁護し続けていた。オロチ軍から投降した呂布は国境の戦闘にて、オロチ軍の服部半蔵の機械化忍者部隊に対して、コサック騎馬隊を率いて大勝を収めた。国境戦のオロチ軍の敗戦理由は――服部半蔵の率いる下忍たちが近代的な機械化の装備を拒絶したからである。機械より己の感覚しか信頼できぬ時代錯誤の兵卒が多かったのである。

――
大河を挟んだ河岸に監視塔が建ち並び、両軍は対峙していた。

「呂布様が何故に大金を手中に収めたのですかって？年末ジャンボで1等賞を当てたのでは」

と、「登β」艾の詰問に対して曹性は答えた。

「パチンコですよ」

魏続も答えた。

（何たる秘密主義！！）

呂布の屋敷の中へ案内を受けた郭淮と「登β」艾の目前に、見慣れた先客が現れた。

「パパ」

長子の「登β」忠である。

アルタイ山脈の山中で迷子になった「登β」忠は巡回中の高順から身柄の保護を受けていた。

シャンデリアの鉛硝子が煌めく客間の中へ案内を受けた。

暖房設備はペチカ。

キリスト教のアイコン画が壁に飾られている。

サファイアで造られたテーブルに置かれた銀の皿に黒パン、ウオツカ。幾人の召使いが戸板の上に地中海産のクロマグロを載せて運んで来た。

「登β」艾は、ルビーが縫い込まれた革貼りの長椅子に構えて挨拶をする呂布と対面した。

「「登β」艾殿。児童虐待も程々にしたら如何ですか？」

「ウゥ」

インパール基地へ復命した張「合β」は自分の兵舎へ戻ると机の上に書き置きの封筒を見つけた。

夏候淵から別離を告げる内容であった。

夏候淵は張「合β」が集めた袈裟を全て奪い取っていた。

(ピピピ)

張「合β」の携帯が鳴った。
郭淮からのメールである。

「登β」艾と郭淮の一行は電波の届く地域へ辿り着いていた。

オロチヨン小屋に潜伏する郭淮に対して司馬懿が現在、ムドン収容所の中で留置を受けて過酷な強制労働を強いられている事実を報告した。ムドンの収容所へ連行された織田信長が脱走して、発見した張「合β」が身柄を収容した。

何故、夏侯淵が離脱したが？

連合軍は二手の派閥に分裂していたのである。

深緑に萌える密林の中に佇むムドンの収容所では――オロチ軍の孫皓が酒瓶を持って浴びるように呑んでいる。

「こんな戦争、負けると判りきっている。アハハ」

孫権の孫である孫皓は捨て鉢な態度を取り続けている。

熱くならず不真面目を装う事が懸命である。

「この非国民め。許さんぞ、孫皓。何でオロチ軍へ入って来たのだ？ 孫権の元へ帰れッ」

卓台を叩いた孫策は幾度も叱責したが孫皓に反省の色が見られず、腹を立てて壁掛の日本刀を取り出した。

「孫皓。介錯をするから直って切腹せよ」

「じいさゝん。児童虐待はいけませんよ」

逃げ回る孫皓を日本刀を振り回しながら孫策が追い回す。

”廳「シューツ」”と振り下された孫策の日本刀を、孫皓の鉄鉤が弾き、奪い取る。

頸元を片腕で絞めつけ、一方の片腕で握る日本刀を、孫策の頸へ引き寄せる。

「私の体力に適うとは到底、思えませんな？まあ、孫奉殿の件は謝罪しますよ」

「おのれッ……」

「あなたも、弟に代わって父君について謝罪するべきである。兄の役目ではないか？」

（ビリリッ）

日本刀で戦袍が引き裂かれ、孫策は全裸の格好にされた。

「謝罪をするのだ。さもないと老人ホームにぶち込みますぞ。弟と一緒にでな」

”
轟”
ドカーン

卓台の上に置かれた孫皓の酒瓶は爆発の衝撃で床畳へ落下した。
オロチ軍の兵站輸送の為に、収容所の捕虜を使役して鉄道を建設中
であった。その工事中の鉄橋は只今、爆破されたのである。

（続く）

※コーエー三国志?で「登β」艾で何回かプレイしましたが、仕様
の問題で蜀滅亡イベントが起こらないのでガッカリ。（＜|＞）

（※OROCHI設定）インパール（南中）の戦い 最終回（木曾義仲、巴御前）

永昌城は相次ぐ連合軍の空爆に拠^よって陥落寸前である。

オロチ軍に依^よるインパール作戦の総大将である木曾義仲は永昌城に本陣を移した。

城中の弾薬も食糧も底をついた。

閑暇を持て余した木曾義仲は今井兼平と囲碁を興じて暇つぶしをしている。

祝融、「フンッ。いい気なもんさ」

孟獲、「ところで朝日將軍様。携帯で本国と連絡が付いたのか？」

本国である倭国の信濃の地ではオロチ軍の地下要塞^{シエルター}が建設された。平清盛は大本営を地下要塞^{シエルター}へ移した。

木曾義仲、「地下要塞^{シエルター}の平清盛殿へ携帯で連絡を何度もやっておりましたが、何分、地下要塞^{シエルター}ですから電波がよう届かんですわ」

朱褒、「どうやら兵站が届く見込みはゼロの様子ですね」

雍凱^{ようがい}、「我々は平清盛殿から見捨てられてしまった様子ですな」

高定、「共食いでもするか」

顎煥^{がくかん}、「おっツ。高定様ツ。何を為されます？……」

顎煥^{がくかん}が死亡した。

孟獲、「じゃあ、ワシは祝融を……」

祝融が死亡した。

山吹、「朝日将軍様、アタシを食べて下さい」
葵、「いいえ、アタシを」

木曾義仲、「じゃあ、御二人とも全身レロレロして喰ってやる」

芸者の葵と山吹が死亡した。

孟獲、「フンツ。あれツ？誰か来やがった」

姜維と夏侯霸との二人が携行袋^{たずさ}を携えて永昌城の城門の前に現れた。

夏侯霸の父親である淵も一緒であつたが張「合β」より説得を受けて連れ戻されている。

「とんでもねエお客様だつ。城門は閉ざして中に入れんじゃないぞ」

城楼の上から孟獲が弩弓^{つが}を番える——”颯「シューツ」
——逸^それ矢から閃避した夏侯霸は城門を叩く。

「孟獲殿、何をするかッ。今より我々はオロチ軍へ降伏するッ。城門を開けませいッ」

「偽りを申せッ!!!」

孟獲が亦^{また}しても弩弓^{つが}を番える――” 颯「シューッ」――矢懸^がかりから姜維は身を翻^{ひるがえ}す。

総大将の木曾義仲より孟獲は窘^{たしな}められた。

「判ったよ。でも食いもんはねーから共食いでもしやがれッ」

城門の上から孟獲が夏侯覇へナイフとフォークを投げてよこす。

夏侯覇、「郭淮殿を連れて来ると良かったかな」

姜維、「食糧ならありますよ」

持参した携行袋の中には沢山のカロリーメイトやレトルト食品が入っている。

姜維、「手回し充電式の懐中電灯もありますよ。各キャリアの携帯電話の充電も出来ます」

夏侯覇、「電子タバコもあります。あとLED電球や電動ローターも……」

「これは便利。皆さん、有難うございます。うう…」

木曾義仲は感謝の余りに涙を流した。

――夏侯覇と姜維の突然の来訪に拠って永昌城内の兵卒たちの空腹が満たされた。

――屋外の森林では見事な胡蝶蘭が咲き乱れる。

夜伽の最中に巴御前は卑弥呼について色々な話を伺った。

「それがし、卑弥呼様の事が欲しいんじや」

「無理よ。諦めるとどう？」

「卑弥呼様、卑弥呼様……」

寝台の上の巴御前の一糸纏わぬ悩ましい肌を月光が白く映じる。

遠い目を向けながら呟く木曾義仲に対して巴御前は途方にくれた。

本土決戦を間近に控えるオロチ軍の敗戦は既に決定的である。

大本営の平清盛は連合軍に対して抗戦を主張をするよう偽装していたが、その実は連合軍に対して降伏する腹である。

それを見通した木曾義仲は幾度も幹部の卑弥呼の誘拐を試みたが、その都度、孫悟空から奪い取られていた。

” 奔、奔”

銃声が城内に鳴り渡る。

スパイ疑惑を受けた朱褒と雍凱ようがいが高定の手で銃殺された。

翌朝、雲南松の生茂る森林を越えた来客が再び現れた。

「遮那王ッ：」

城楼の物見から木曾義仲が源義経の姿を認めた。

「何をしに来た？」

「やあ、センセー。貴殿がおらぬと些さやか退屈に思うての事じゃ」

源義経は赤化した連合軍の態度を快く思わなかった。

(ドン、ドン、ドン)

「義仲。城門を開くのだ」

城門を叩く義経の脇側を”轟”と鉛玉が擦過——三八式歩兵銃を構える木曾義仲が城楼の上から狙い定める。

”轟”
”轟”

「何をするッ、コラッ」

体軀の全身から温かい血飛沫が溢れる感覚——遠くなる感覚の中で——石器時代の頃から現在に至る遺伝子に宿る記憶を想起した。建設と破壊の歴史は今だから特別だと云う道理でもなかった。其の次は女達について考えた。

静御前は笑っているのか？

否、怒っているだろう。

城楼の上で微笑む巴御前——彼女も勿論——あの卑弥呼様も——
——本心では怒っていたのだろう。

（インパールの戦い 完）

小嶋16（豊臣秀吉、秀次） ※チビが悩みの秀吉

昔の土曜の夜はテレビ番組『オレたち瓢箪族』が大流行。

リーダー格のヒデチャンマン（豊臣秀吉）は配下の『ヒデヨシ軍団』を酷使していた。

ヒデチャンマン（秀吉）に対して逆らうと”采配”で”戛戛”^{バンバン}と容赦なく打たれる。

ヒデチャンマン（秀吉）、
「おいッ。孫七郎（秀次）」

秀次、「はい？」

ヒデチャンマン（秀吉）、
「ワシは身の丈が足らぬ。どうしたら良いだろうか？」

秀次、「川畑式体操”は？」

ヒデチャンマン（秀吉）、
”川畑式体操”は昔の通販広告で見たぞ」

秀次、「やはり通販広告なんてインチキに決まっています……別な策は如何です？」

ヒデチャンマン（秀吉）、
「ワシの身の丈を伸ばす策が有るとでも？」

秀次、「仰向けの格好にして両手と両足を麻縄で括る。括った麻縄を牛馬が強く引っ張る。……これで身の丈は伸びるでしょうな」

ヒデチャンマン（秀吉）、

「アハハ……。冗談が過ぎるのう」

（終）

小咄17 (張飛(♀)、諸葛亮(♀)、張魯) ※芸能界本日モ反省ノ色ナシ

※※作者注…張飛は中森○○をモデルにしているのですが中森○○を知らない人は読まなくていいですよ※※※

アイドル歌手の張コウ儁父(♀)と張飛翼徳(♀)はライバル同士。
張コウ儁父(♀)はブリッコ娘路線。
張飛翼徳(♀)はツッパリ少女路線。
対象的な二人の大物歌手について業界の各芸能ニュース誌は競って、興味本位な記事を書き立てた。

「少年A」は張飛翼徳(♀)の未曾有の大ヒット曲である。(※小咄3を参照)

諸葛亮(♀)、「張飛。次のシングルは何を歌うのだ？」

諸葛亮(♀)は小役の時代に出演したドラマ「不良少女(張飛)の仲間」と呼ばれて」で名子役としての地位を確立した。

成長して新人歌手としてデビューした諸葛亮(♀)は既にベテランの域に達している。

芸能プロダクション「蜀漢」では張飛(♀)のみならず劉備玄德(♀)や諸葛亮(♀)も在籍している。

張飛(♀)、「俺様の新曲は”Desier”だよ」

諸葛亮（♀）は張飛の新曲”Desier”の譜面を眺める。

「ロングトーンを使用する曲ですね」

”ロングトーン”とは演歌歌手のように長く発声を続ける唱法の事である。

張飛（♀）、「ア~~~~~とと~~~~息切れするぜ」

張魯、「息切れをしないように”ロングトーン”を始める為には五斗米道で呼吸法の訓練をしないと良いでしょう」

張飛（♀）、「勧誘か？本当にテメーらの団体で呼吸法の訓練をして大丈夫なのか？」

張魯、「大丈夫ですとも」

——”ロングトーン”の技術を得る為に張飛は翌日から五斗米道の義舎で呼吸法の訓練を始めた。

張飛（♀）、「ロングトーンが出来るようになったぞ」

諸葛亮（♀）、「本当か？」

劉備玄德（♀）、「良かったな。聴かせてくれよ」

張飛（♀）、「アア~~~~~」

~~~~~ツ「

諸葛亮（♀）、「もう良いです」

”  
嘩  
「ガシヤン」  
”

芸能プロダクション「蜀漢」の本社ビルの窓ガラスが割れた。

張飛（♀）、「特殊ガラスまで割れるとは……。まあいいや。これで新曲”Desier”のロングトーンは大丈夫だろう」

張飛（♀）の自宅の高級マンションへマネージャーの張達と范彊が呼び出された。

張飛（♀）、「オイッ。張達。范彊。ワシのロングトーンの練習を聴いてくれよ」

張達&范彊、「は……はいっ」

[illegible]



小咄18（呂布、貂蟬、張遼） ※ほのぼの路線です

呂布、「張遼は倭人と交易して儲けたって？お前に商売なんて判るものか」

張遼、「〓倭人の通貨を買い集めたんです。先史の社会でも我が国と倭国との間で交流があったらしいですね」

呂布、「倭国は円高ですからな」

陳宮、「倭国の古事記の登場人物の中には我が国の人物が含まれているかもしれません」

呂布、「俺が古事記に出るんだったらスサノオかな。白ウサギでも良いかな」

貂蟬、「ウサちゃんの話があるの？どんな話？」

呂布、「因幡の白ウサギが”東京ビューティーセンター”まで出かけて永久脱毛する話だよ」

陳宮、「〓そんな話は置いといて。呂布様は古事記のスサノオの如きであります」

※←陳宮の古事記の想像※

（チャリ〓ン）

（チャリ〓ン）

貂蟬、「（ペコリ）右と左の旦那様〜」

呂布、「（ペコペコ）お恵みくださいませして有難うございます〜」

（終）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1313j/>

---

無双オラッチ(三國無双の短編小説集)※OROCHI有 ※少しエロパロ

2011年11月4日04時12分発行